

Avadānakalpalatāにおける〈寂静〉の〈情〉について

山崎 一穂

1 はじめに

カシミールの詩人クシェーメンドラ (Kṣemendra、西暦 990–1066 年頃) はブツダと彼の弟子達の伝説を流麗な詩文で歌い上げた 108 章からなる仏教説話集成 *Avadānakalpalatā* (Av-klp) を西暦 1052 年に著している。Av-klp は仏教美文作品というジャンルに分類される作品であるが、詩文のみで説話を叙述する形式をとっている点、西暦九世紀以降の文壇で重視される〈情〉(rasa) の理論をとり入れている点で、クマーララータ (Kumārālatā、西暦二世紀後半頃) を先蹤とする仏教詩人達によって著された美文体の仏教説話集成と一線を画している¹。

クシェーメンドラはまた、39 の詩節とそれに対する散文の自註からなる詩論書 *Aucityavicāracarcā* を著している。彼は同書で、詩文学を構成する 27 の要素をどのようにして詩文学で描かれる事物と適合させるべきかという〈適切性〉(aucitya) の問題を、自身やカーリダーサ (Kālidāsa、西暦 4–5 世紀) に代表される詩人達に帰せられる諸作品から詩節を引用しながら、例証している。クシェーメンドラは同書に Av-klp から三詩節を引用し、〈情〉の〈適切性〉の例証にあてられた第 16–18 詩節に対する自註で、Av-klp という作品全体では、古典演劇論でその存在を認められている九種類の〈情〉のうち、〈寂静〉(śānta) が示唆されていると説明する²。しかし、彼は Av-klp で〈寂静〉だけを示唆している訳ではなく、描写対象に応じて様々な〈情〉を示唆していることは山崎 2020 で明らかにしている通りである。本論では、古典演劇論書 *Nāṭyaśāstra* に説かれる〈寂静〉の定義及び *Aucityavicāracarcā* で例証される〈寂静〉の〈適切性〉を踏まえた上で、Av-klp 第 39 章に焦点をあて、クシェーメンドラが〈寂静〉をどのように示唆しているかという問題を検討する。

2 古典詩論における〈寂静〉の〈情〉

2.1 *Nāṭyaśāstra* における〈寂静〉の定義

本題に入る前に〈寂静〉の定義を見よう。バラタ (Bharata) に帰せられる演劇論書 *Nāṭyaśāstra* の第六章は〈情〉の定義にあてられている。バラタは〈恋〉(śṛṅgāra)、〈滑稽〉(hāsyā)、〈悲〉(karuṇā)、〈憤怒〉(raudra)、〈勇猛〉(vīra)、〈恐怖〉(bhayānaka)、〈嫌悪〉(bibhatsa)、〈驚異〉(adbhuta) という八種類の〈情〉の存在を認めている。後の時代の詩論家達はこれらに〈寂静〉を加えた九種類の〈情〉の存在を認め、〈寂静〉とは何かを説明する散文の一節と六つの詩節を同論書に挿入している。この散文部分と詩節部分のうち、〈寂静〉の概括的な定義がなされているのは前者である。後者は前者の内容を補足し、〈恋〉を始めとする八種類の〈情〉の〈基本的感情〉と〈寂静〉との関係を説明するものである³。ここでは散文部分を見よう。原文は次の通りである。

¹西暦二世紀から西暦 11 世紀までに著された美文体の仏教説話集成の文体形式の変遷については、HAHN 1985: 10–16 を見よ。クマーララータの仏教説話集成 *Kalpanāmaṇḍītikā* とその漢訳『大莊嚴經論』(T. 201 [iv]) との関係、彼とアシュヴァゴーシャ (Aśvaghōṣa) の同一人物説については、HAHN 1982 を見よ。アシュヴァゴーシャに帰せられる論書 *Sūtrālaṃkāra* の断片については、松田 2020, 2021 を参照せよ。

²RAGHAVAN 1940: 45 を見よ。

³韻文部分に対する翻訳については、MASSON and PATWARDHAN 1969: 93 の英訳及びこれを踏まえた上村 1990: 201–202 の和訳を見よ。

Nāṭyaśāstra 1:167.7–168.2: atha śānto nāma śamasthāyibhāvātmako mokṣapravartakaḥ | sa tu tattvajñānavairāgyāśayaśuddhyādibhir vibhāvaiḥ samutpadyate | tasya yamaniyamādhyātma-dhyānadhāraṇopāsanasarvabhūṭadayālīṅagrahaṇādibhir anubhāvair abhinayaḥ prayoktavyaḥ | vy-abhicāriṇaś cāsyā nirvedasmṛtidhṛtisarvāśramaśaucastambharomāñcādayaḥ |

さて〈寂靜〉という名の〔〈情〉〕は、〈静寂〉(śama)という〈基本的感情〉(sthāyibhāva)をその本質とし、解脱を起こさせるものである。そしてそれ(〈寂靜〉)は真実を認識すること、欲を離れること、心を清浄にすることを始めとする諸々の〈感情喚起条件〉(vibhāva)を理由に生まれる。そ〔の〈情〉〕の〈演技〉(abhinaya)は、制戒(yama)や内制(niyama)、アートマンを瞑想すること(adhyātmadhyāna)、凝念(dhāraṇā)、帰依(upāsana)、生きとし生ける者達に対する憐み(sarvabhūṭadayā)、修行者の特徴をとること(liṅagrahaṇa)を始めとする諸々の〈身体表現〉(anubhāva)で演じられるべきである⁴。そして、厭世や想起、充足感、〔四〕住期すべてにおいて清浄を保つこと、動けなくなること、身の毛が立つことを始めとするものが、こ〔の〈情〉〕の〈付随的感情〉(vyabhicāribhāva)である。

ダナンジャヤ(Dhanamjaya、西暦9–10世紀)に代表される中印の詩論家達は〈寂靜〉を〈情〉の一つに認めないのに対し、アビナヴァグプタ(Abhinavagupta、西暦950–1020年頃)に代表されるカシミールの詩論家達は〈寂靜〉を〈情〉の一つに認めている。また、カシミールの詩論家達の間でも〈寂靜〉の〈基本的感情〉とは何かという問題をめぐる議論がなされている⁵。現行の*Nāṭyaśāstra*第六章第17詩節には九種類の〈情〉に対応する九種類の〈基本的感情〉が列挙されている。しかし、この詩節は〈寂靜〉を認める詩論家によって改変されたものであり、本来は八種類の〈基本的感情〉のみが列挙された詩節であったことは、上村1990:199–200が指摘する通りである。詩論家インドウラージャ(Indurāja、西暦10世紀)は、ウドバタ(Udbhaṭa、西暦八世紀頃)の詩論書*Kāvyaḥśāstra*第四章第二詩節に対する註釈中に改変された*Nāṭyaśāstra*第六章第17詩節を引用し、〈静寂〉が〈寂靜〉の〈基本的感情〉であるという見解をとる⁶。アビナヴァグプタはこの見解を斥け、*Nāṭyaśāstra*第六章に挿入された〈寂靜〉とその〈基本的感情〉に関する説明部分を援用することなく、次のように説明する。すなわち、〈寂靜〉の〈基本的感情〉とは真実の認識(tattvajñāna)であり、アートマンそれ自体(ātmasvarūpa)である。〈静寂〉はアートマンの性質(ātmasvabhāva)である。このアートマンは、〈恋〉を始めとする八種類の〈情〉の〈基本的感情〉と同列に位置づけられるものではなく、それらの根源となるものである。八種類の〈基本的感情〉はアートマンの存在を前提として生まれるのであり、これらは消滅してもアートマンは常住不変(sthāyitama)であるから、アートマンの〈付随的感情〉と呼ぶべきものである。〈寂靜〉とその〈基本的感情〉であるアートマンは八種類の〈情〉の〈基本的感情〉の基礎となるものであるから、バラタは〈寂靜〉とその〈基本的感情〉を〈恋〉を始めとする八種類の〈情〉とその〈基本的感情〉と別立てして述べてはいないとアビナヴァグプタは説明する⁷。

2.2 *Aucityavicāracarcā*における〈寂靜〉の〈適切性〉の例証

クシェーメンドラは*Aucityavicāracarcā*の第16詩節を〈情の適切性〉(rasaucitya)の例証にあてている。彼は〈寂靜〉を含む九種類の〈情〉の存在を認め、作品の鑑賞者(sahṛdaya)の〈基本的感情〉が高められて〈情〉になると考えたようである⁸。残念なことに、〈寂靜〉の〈適切性〉の

⁴ここで列挙される〈演技〉は、MASSON and PATWARDHAN 1969: 92, n. 6によれば、*Yogasūtra* 2.29に説かれる八実習法を前提にしているという。

⁵RAGHAVAN 1940: 59–90を見よ。

⁶RAGHAVAN 1940: 59–62を見よ。

⁷RAGHAVAN 1940: 85–90を見よ。

⁸山崎 2021a: 78, n. 25を見よ。

例証で、彼は〈寂靜〉の〈基本的感情〉が何であるかを明らかにしていない。クシェーメンドラはアビナヴァグプタの弟子であることを自称しているから、彼の見解を踏襲していたとも考えられる。しかし、彼はインドウラージャも知っていたから、彼の見解を受け入れていた可能性もある。ここでは〈寂靜〉の〈基本的感情〉とは何かという問題は措いて、〈寂靜〉と〈適切性〉の関係を見よう。クシェーメンドラは〈寂靜〉が適切に示唆されている詩節の例として、自身の *Caturvargasamgraha* と *Munimatamīmāṃsā* からそれぞれ一詩節を引用し、次のように説明する。

Caturvargasamgraha 4.7: bhoge rogabhayaṃ sukhe kṣayabhayaṃ vitte 'gnibhūbhṛdbhayaṃ
dāsyē svāmbhayaṃ guṇe khalabhayaṃ vaṃśe kuyoṣidbhayaṃ |
māne mlānibhayaṃ jaye ripubhayaṃ kāye kṛtāntād bhayaṃ
sarvaṃ nāma bhava bhaved bhayaṃ aho vairāgyam evābhayaṃ ||

享受することがあれば、病気への恐怖が、快楽があれば、それが消えてしまうことへの恐怖が、資産があれば、火や国王への恐怖が、下僕の身分であれば、主人への恐怖が、美質があれば、悪意を抱く者達への恐怖が、家系が存続していれば、身持ちの悪い婦女への恐怖が、自負があれば、それが衰えてしまうことへの恐怖が、勝利を取れば、敵への恐れが、身体があれば、死への恐怖が生まれる。輪廻生存世界では、じつにありとあらゆるものは恐怖の原因となりうるのだ。ああ、恐怖を感じないこととは欲を離れることに他ならないのだ。

Aucityavicāracarcā 131.1–3: atra sakalajanābhimatābhogasukhavittādīnāṃ bhayamayatayā
heyatāṃ pratipādyā vairāgyam eva sakalabhayāyāśāśamanam upādeyatayā yad upanyastaṃ tena
śāntarasasya nirargalamārgāvatarāṇam ucitataram upadiṣṭaṃ bhavati |

ここでは、ありとあらゆる人々が求める享受行為や快楽、財産を始めとするものは、恐怖を内在させているから、捨てられねばならないということを説明した後で、ありとあらゆる恐怖がもたらす心労を鎮める手段は欲を離れること以外にないということが、是認されるべきであることとして、提示されている。そのことを通じて、遮られることなく〔解脱の〕道へ入って行くことが〈寂靜という情〉に非常に適切であることが教示されていることになる。

Aucityavicāracarcā 131.5–8: kusumaśayanam pāṣāṇo vā priyam bhavanam vanam
pratānu masṛṅgasparśam vāsas tvag apy atha tāravī |
sarasam aśanam kulmāṣo vā dhanāni tṛṇāni vā
śamasukhasudhāpānakṣaibye samaṃ hi mahātmanām ||

およそ気高い者達が静寂という楽をもたらす甘露を飲むことで酩酊した状態にある時、じつに、彼等にとって、花の褥も石も、そして心地よい御殿も森も、繊細で柔らかい触り心地のする衣も樹皮も、味の良い食物も酸い粥も、財産も草〔の葉〕も変わりはないのだ⁹。

Aucityavicāracarcā 131.9–12: atra sakalavikalpatalparahitābhedāvabhāsamānātmatattvaviśrānti-
janitasarvasāmyasamullasitaśamasukhapīyūṣapānoditanityānandaghūrṇamānamānasānām priyā-
priasukhaduḥkhādiṣu mahatām sadṛśī pratipattir iti jīvanmuktisamucitam abhihitam ||

ありとあらゆる概念構想作用の拠り所(迷妄)がなくなり¹⁰、〔ブラフマンと〕同一のもの

⁹クシェーメンドラに帰せられる *Munimatamīmāṃsā* という作品は現存しない。*Aucityavicāracarcā* には同作品から 16 詩節が引用されているが、詩論書 *Kavikaṅṭhābharāṇa* と韻律論書 *Suvṛttatilaka* には詩節が引用されていない。*Aucityavicāracarcā* に引用された詩節の文体上の特徴などから考えて、*Munimatamīmāṃsā* は Av-klp と近い時期に書かれた作品と思われる。

¹⁰sakalavikalpatalparahita 「ありとあらゆる概念構想作用の拠り所(迷妄)がなくなった」という複合語が註釈原文のどの語を限定しているかについては、少なくとも、二つの可能性が考えられよう。第一は「偉大な者達」(mahatām) という語を限定しているという可能性であり、第二は「アートマン」(ātma^o) という語を限定しているという可能性である。ここでは後者をとった。それは次の理由による。vikalpatalpa という複合語の用例はクシェーメンドラの *Daśavatāracarita* 第八章第 687 詩節に見られる。問題の詩節の後半二句の原文は次の通りである。*Daśavatāracarita* 8.687cd: sasmāra smaraṇīyam antasamaye samṭoṣaviśrāntadhīḥ

して顕現しているアートマンの真の性質である心の落ち着きによって生み出された、あらゆるものが同一だと認識する性質から現れた静寂がもたらす楽という甘露を飲むことで生まれた常住不滅の喜びで動いている心をした偉大な者というのは¹¹、好きなものがもたらす快樂と嫌いなものがもたらす苦痛を始めとするものについて同じような理解をなすということが、生前解脱にふさわしい形で、ここでは述べられている。

以上二詩節から知ることができるのは、クシェーメンドラが欲を離れること (vairāgya) を〈寂静〉の〈感情喚起条件〉の一つと考えていたということだけである。問題の二詩節の内容だけからは、詩人がどのように〈寂静〉を示唆すべきであると彼が考えていたかを知るのは困難である。このことを知る上で、〈寂静〉が適切に示唆されていない詩節の例として彼が引用するウトパララージャ (Utpalarāja) の詩節とそれに対する註釈は有益な手がかりを我々に与える¹²。原文を見よう。

Aucityavicāracarcā 131.14–17: ahau vā hāre vā balavati ripau suhṛdi vā
maṇau vā loṣṭe vā kusumaśayane vā dṛṣadi vā |
tṛṇe vā straiṇe vā mama samadr̥ṣo yāntu divasāḥ
kvacit puṇyāraṇye śivaśivaśiveti pralapataḥ ||

蛇に対しても真珠の首飾りに対しても、強力な敵に対しても友人に対しても、宝珠に対しても土塊に対しても、花の褥に対しても岩に対しても、草〔の葉〕に対しても女性に対しても同じ見方をし、「シヴァよ、シヴァよ、シヴァよ」と口ずさんでいる私が送る日々は、どことも知れない聖なる荒れ野で、きっと過ぎ行くに違いない。

Aucityavicāracarcā 131.18–23: atra jīvanmuktocitaṃ priyāpriyarāgadveṣopāśamalakṣaṇamokṣa-
kṣamaṃ sarvasāmyam ahihārasuhṛdarisamadṛṣtirūpam abhidadhatā kvacit puṇyāraṇye yad abhi-
hitaṃ tad vikalpapatipādakam abhedavāsanāviruddham anucitam avabhāsate | dhārādhirūḍha-
sarvasāmyavigalitaḥ abhedābhīmānagranther hi sarvatra sarvaṃ śivamayam paśyatas tapovane
nagarāvaskarakūṭe ca vimalātmalābhatṛptatayā samānadṛṣaḥ kvacit puṇyāraṇyādivacanam anucitoc-
cāraṇam eva ||

ここでは、生前解脱している者にとって適切な、好きなものに対する愛着と嫌いなものに対する憎悪を鎮めることに特徴づけられる解脱を可能にする、蛇と真珠の首飾り、友と敵を等しく見るという、あらゆるものを同一視することについて語っている者がどことも知れない聖なる荒れ野で述べていることは、概念構想作用を理解させ、差異はないことを心に印象付けることと矛盾しており、不適切に思われる。じつに、最高の境地に到達していて、あらゆるものが同一だと認識する性質を理由に差異化したり慢心を抱いたりするという妨げがなくなった、「遍在するすべてのものはシヴァよりなるのだ」と観察している、汚れのないアートマンを手に入れたことで満足していることを理由に苦行の森と都城の排泄物の蓄積場とを

śāntānantavikalpatalpavimale citte 'cyutaṃ so 'cyutam || (「死を迎える時、満足して心の働きが鎮まった彼は、想起の対象である不滅なる者(ヴィシシュヌ)のことを、無数の概念構想作用の抛り所が消滅し、汚れを離れた心の中で、しっかりと想起した。)。詩節 d 句冒頭部の śāntānantavikalpatalpavimale という複合語は śāntānantavikalpatalpa「無数の概念構想作用の抛り所が消滅した」という属格所有複合語と vimala「汚れのない」という語からなる同格限定複合語であり、「心」(citta) という語を限定していることがわかる。クシェーメンドラが「心」(citta) と「アートマン」(ātman) の関係をどのように理解していたのかは明確でないが、問題の複合語は精神作用の主体を表す語の限定句として用いられている可能性が高いだろう。

¹¹sarvasāmya という複合語は、文字通りには、「あらゆる事物が〔或る者にとって〕同じであるという性質」と解釈されよう。したがって、この語によって示唆される意味は「あらゆる事物を同じであるか或る者が認識すること」ではないか。ここでは「あらゆるものが同一だと認識する性質」と解釈する。

¹²詩論家マンマタ (Mammata) は、〈寂静〉を例証する目的で、この詩節を *Kāvyaṣāstra* 第 35 詩節以下に引用する。なお、マンマタは真実の認識 (tattvajñāna) から生まれる厭世 (nirveda) が〈寂静〉の〈基本的感情〉であるという見解をとる。この見解とそれに対する反論については、RAGHAVAN 1940: 66–73 を見よ。

等しいものと見ている者が発する「どことも知れない聖なる荒れ野云々」という言葉はじつに不適切に発せられた言葉である。

クシェーメンドラによれば、生前解脱し、概念構想作用がなくなり、ものごとを等しく見る能力のある者が「聖なる」(puṇya) という概念構想作用が介在する言葉を発することは不適切であるという。〈寂靜〉は、概念構想作用を離れた認識をなす主人公 (nāyaka) の〈身体表現〉などで示唆される〈情〉であるから、その主人公の身体的行為や言葉、心の働きを、美醜や聖俗といった、概念構想作用が介在する語を交えて描くことを詩人は避けるべきであると彼は考えていたことがわかる。

3 Av-klp 第 39 章第 101–107 詩節

本題に移ろう。Av-klp 第 39 章は 107 詩節からなり、民衆に誤った教えを説いたことを理由に海獣 (makara) に生まれ変わった異教徒カピラ (Kapila) の物語の叙述にあてられている¹³。以下に検討するのはその第 101–107 詩節である。その原文は以下の通りである。

Av-klp 39.101–107: ity uktvā tatra bhagavān dharmam ādiśya śāśvatam |
 janasyānugrahaṃ cakre nānābodhividhāyakam || 39.101 ||
 tataḥ prayāte svapadaṃ jine tanmayamānaṣaḥ |
 makaraḥ projjhitāhāras tyaktvā dehaṃ divaṃ yayau || 39.102 ||
 cāturmahārājikeṣu deveṣu viśadadyutiḥ |
 śrīmān sa jātaḥ sugate kṣaṇaṃ cittaprasādanāt || 39.103 ||
 tataḥ pūrṇenduvadanaḥ sragvī rucirakuṇḍalaḥ |
 sa sākāra ivānandaḥ sugataṃ draṣṭum āyayau || 39.104 ||
 prakīrṇadivyakusumaḥ kirīṭasprṣṭabhūṭalaḥ |
 prabhāpūritadikkakras taṃ bhaktyā praṇanāma saḥ || 39.105 ||
 cakre tasyopaviṣṭasya bhagavān dharmadeśanām |
 yayā srotaḥphalaṃ prāpya satyadarśī jagāma saḥ || 39.106 ||
 tṛṇam iva *gurukāyo¹⁴ 'py uddhṛtaḥ pāpapañkā
 iti sa janānikāyaḥ so 'pi *duḥkhāj jinena¹⁵ |
 vyasanānīpatitānām līlayā puṇyaśīlā
 nikhilam atulamūlaṃ kleśam unmūlayanti || 39.107 ||

[101] このように述べて、永遠の法をそこで説いてから、世尊は人々が様々な形で覚りを得ることを可能にする恩恵を彼等に施した。

[102] それから、勝者が自分の住む場所に戻って行くと、海獣は彼(世尊)にひたすら心を向けるようになり、食物を摂ることをやめて、肉体を捨てた後、天界に行った。

[103] 善逝に対してすぐに信心を抱いたので、彼は、四大王の神族の中に、無垢な輝きを発する吉祥な者として生まれた。

[104] それから、満月のような顔をした彼は、花環を掛け、輝く耳飾りをつけて、善逝に会いにやって来た。その彼はあたかも歓喜が姿形をとっていたかのように見えた。

¹³根本説一切有部の律蔵の「律分別」(Vinayavibhaṅga)に見られるカピラの物語の概要については、PANGLUNG 1981: 129–130 を見よ。

¹⁴*gurukāyo] Ex conj. Ed.; gurukāryo DZ, Tib. has *bya ba dka'* (*gurukāryo).

¹⁵*duḥkhāj jinena] Ex conj. Ed.; duḥkhārjanena DZ, Tib. has *sduḡ bsngal bsgrubs pa yis* (*duḥkhārjanena).

[105] 彼は天上の花々を撒き、冠〔を載せた頭〕を大地につけて、世界全体を明るい光線で照らして、信愛の心から、彼(世尊)に平伏した。

[106] 世尊は〔自分の所に〕やってきた彼(海獣)に法を教示した。その教えの力で、彼は真実をありありと見るようになり、預流果を得て、去って行った。

[107] このように、ちょうど草を引き抜くように、罪という泥沼から重い身体をしたその〔海獣〕も、苦しみの底からその人々の一団も勝者は救い上げた¹⁶。およそ徳をいつも修める人というのは、いともたやすく、苦境に陥った人々の〔心に〕深く根をおろした煩惱を残らず取り抜くものである。

海獣に生まれ変わっていたカピラが、ブッダが教示した法を聞いて食を絶ち、天界に再生した後、預流果を得て真実を見る者となったことが物語られている。ここでまず注目すべきは、第105詩節と第106詩節にそれぞれ、「〔カピラは〕信愛を理由に平伏した」(bhaktyā praṇānāma)と「真実を見る」(satyadarśī)という語が見られることである。Nāṭyaśāstra 第六章で与えられる〈寂静〉の定義によれば、この二つはそれぞれ、〈寂静〉の〈感情喚起条件〉と〈身体表現〉を表す語とされている。

また、問題の一連の詩節の原文を見ると、次のような特徴を指摘することができる。すなわち、ブッダのもとを訪れるカピラと彼に法を教示するブッダの描写に、第103詩節b句の「無垢な」(viśada)という語を例外として、概念構想作用が介在する言葉が用いられていないことである。これは、例えば、「か細い」(tanu)、「新鮮な」(nava)、「大きくて肉付きのよい」(pr̥thupīna)という概念構想作用が介在する語とともに、それぞれ「女」(aṅgī)、「若さ」(yauvana)、「臀部」(nitambabimba)という語を用いて、〈恋〉を示唆する手法と対照的である。これはクシェーメンドラがAucityavicāracarcāで例示する〈寂静〉の〈適切性〉の理論と一致する。以上を踏まえると、問題の詩節では〈寂静〉が示唆されている可能性が高いことがわかる。

また、ここで用いられている〈文体の飾り〉(alaṅkāra)も〈情〉を考える上で重要な示唆を与える。第107詩節の前半二句に注目されたい。同詩節では、「人々の一団」(jananikāyaḥ)と言外に含まれた「海獣」(makaraḥ)を現実存在する事物である「草」(tṛṇam)に喩える〈直喩〉(upamā)が用いられている。この〈直喩〉には次のような文体上の〈欠陥〉(doṣa)がある。つまり、喩えるも

¹⁶問題箇所の子音のサンスクリット音写の読みは、DE JONG 1996: 88が指摘する通り、gurukāryo [...] duḥkhārjanena である。この読みは対応するチベット訳 bya ba dka' [...] sdug bsgal bsgrubs pa yis からも支持される。しかし、ここでは校訂本が推定する *gurukāyo [...] duḥkhāj jīnena という読みを我々はとるべきである。まず、gurukāyo という読みは本章第3-4詩節の文脈から支持される読みである。Av-klp 39.3-4: tasyāḥ kaivartasārthena gambhīre 'mbhasi dustare | kadācid ghoramakaraḥ kṣiptvā jālaṃ samuddhṛtaḥ || aṣṭādaśaśīrāḥ *simhadvipadvīpikharānanaḥ () Ex conj. DE JONG; *°dvīradaprakharānanaḥ Ex conj. Ed.; °dvīpadvīpakharānanaḥ DZ) | nṛṇāṃ sahasrair ākr̥ṣṭaḥ parvatākāravigrahaḥ || (「[3] ある時、漁師の一団が、その〔ヴァルグマティー河の〕深くで渡って行くことも容易ではない水の中に網を投じて、恐ろしい海獣を引き上げた。[4] 頭が十八つについて、顔が獅子や象、豹〔の顔〕と同じくらい人を寄せ付け難く、身体が山のような形をした〔その海獣〕を千人の人々が引っ張った。」。この二詩節の文脈から考えて、第107詩節b句冒頭部の指示代名詞 sa が指すものは「海獣」(makara)であり、その海獣の身体が大きかったことがわかる。

次に *duḥkhāj jīnena という読みの是非を検討しよう。確かにプロト・ベンガル文字でも、チベット文字草書体 (dBu med script) でも、duḥkhāj jīnena という読みが duḥkhārjanena と筆写される可能性は低い。しかし、次の理由から考えて、duḥkhārjanena という読みが元の読みであった可能性は低い。

(1) 詩節 ab 句では「重い身体をした〔海獣〕が救い上げられた」、「人々の一団が救い上げられた」という構造を等しくする二つの文が並列されているはずである。このことは、それぞれの文の主語の直後に不変化詞 api が付されていることから、明らかである。duḥkhārjanena という読みをとると、一方の文では動詞語根 ud-dhr̥が表示する「救い上げる」という行為の〈起点〉(apādāna)が明示されるのに対し、もう一方の文では〈起点〉が明示されず、二つの文の均衡が崩れてしまうことになる。

(2) duḥkhārjana という複合語の用例は見られない

この二点を考慮するならば、我々は校訂本が推定する *duḥkhāj jīnena という読みを元の読みと考え、これをとるべきである。

この文法上の性が中性であるのに対し、喩えられるもののそれは男性であり、両者を限定しなければならない「引き抜く」(uddhṛtaḥ)という語が、喩えるものである「草」を文法上限定していないことである。喩えるものと喩えられるもの間に文法上の一致が成立しない〈直喩〉が戯曲作品で用いられており、それが〈情〉が示唆されていることを理由に正当化されている例があることはすでに指摘した¹⁷。しかし、我々はここで次のことに注意しなければならない。すなわち、事物 x を草に喩える〈直喩〉は、ハリバッタ (Haribhaṭṭa、西暦五世紀頃)の *Jātakamālā* にすでにその用例があり、彼の活動期以降に著された美文作品で好んで用いられていることである¹⁸。〈直喩〉が世間的な言語使用 (laukika) で用いられる場合、詩論家は喩えるものと喩えられるものの文法上の不一致を認めている¹⁹。したがって、文法上の不一致を考慮せず、事物 x を草に喩える〈直喩〉を用いることが世間的な言語使用で認められていたという可能性があろう。また、喩えるものと喩えられるもの間に文法上の一致が成立しない〈直喩〉の使用が戯曲作品で認められているからといって、「聞かれる美文作品」(śravya)である詩文作品でも認められていたとは限らない。なぜなら、「見られる美文作品」(dṛśya)であるという性格上、戯曲作品で〈情〉が重視されるのは当然のことであるからである。〈情〉が示唆されているという理由で、喩えるものである草と喩えられるものである事物 x の間の文法上の不一致が問題の〈直喩〉で許容されているということを証明するには、同じ用例を詩文作品に求める必要があろう。これに該当する〈直喩〉の用例を詩文作品に探すと、我々は詩人バーナ (Bāna、西暦七世紀)に帰せられる宗教抒情詩 *Caṇḍīsataka* の第 51 詩節にこれを見ることができる。原文は次の通りである。

Caṇḍīsataka 51: kṛtvā pātālapaṅke kṣayarayamilitaikārṇavecchāvagāhaṃ
dāhān netratrāyāgner vilayanavigalacchrṅgaśūnyottamāṅgaḥ |
krīḍākroḍābhiṣāṅkāṃ vidadhad apihitavyomasīmā mahimnā
vīkṣya kṣuṅṇo yayāris tṛṇam iva mahiṣaḥ sāvatād ambikā vaḥ ||

世界帰滅時の勢いあふれる水を湛える海を求めて地底界の泥の中に潜ってから、その体の大きさを空の果てまでもを覆いつくしたので、「[ヴィシュヌの権化としての]愛玩のための野猪だ」という錯覚をもたらし、三つの眼から発せられた火に焼かれ溶け落ちた二本の角が頭上から消失しているマヒシヤという敵を、じっと見つめてから、ちょうど草〔の葉〕を踏みつぶすように、踏みつぶしたアンビカーが貴方様を守らんことを。

ここでは、「敵」(aris)が現実に存在する事物である「草〔の葉〕」(tṛṇam)に喩えられている。前者の文法上の性は男性であるのに対し、後者のそれは中性である。したがって、詩節中の「溶け落ちた二本の角が頭上から消失している」(vilayanavigalacchrṅgaśūnyottamāṅgaḥ)、「空の果てまでもを覆いつくした」(apihitavyomasīmā)、「[錯覚を]もたらす」(vidadhad)、「踏みつぶされる」(kṣuṅṇaḥ)という語は後者を限定しないことになる。この詩節では特定の〈情〉が示唆されているか。そのことを明確に示す〈感情表現〉などに関する語を問題の詩節とその前後の詩節に見出すことはできない。この事実だけに注目するならば、文法上の不一致を考慮せず、事物 x を草に喩える世間的な言語使用があり、バーナがこれに従ったと考えられよう。しかし、問題の詩節で〈情〉が示唆されている可能性を示す一点の証拠を我々はクシェーメンドラの韻律論書 *Suṅṛttatilaka* に見出すことができる。それは同書の第三章第 19 詩節 ab 句である。彼はここで、〈勇猛〉と〈憤怒〉

¹⁷YAMASAKI 2021b を見よ。

¹⁸*Haribhaṭṭajātakamālā* 11.1: tṛṇam iva jīvitam iṣṭam karuṇānugatāḥ parārtham ujjhantaḥ | kaṭhinamanasām api mano nayanti mṛdutām mahātmānaḥ || (「およそ、憐みを失うことのない気高い者というのは、他者のために、ちょうど草〔の葉〕を求められれば、それを手放すように、命を求められれば、それを手放し、無慈悲な心をした者達の心すら柔和になすものだ。)。この例では「命」(jīvitam)が「草〔の葉〕」(tṛṇam)に喩えられているが、両者に文法上の不一致はなく、「求められた」(iṣṭam)という語は喩えるものと喩えられるものを限定している。

¹⁹*Kāvyaḷamkārasūtra* 4.2.14 とそれに対する *Vṛtti* を見よ。翻訳については、JHA 1917: 75–76 を参照せよ。

という二種類の〈情〉を同時に示唆する時、詩人は韻律 *vasantatilakā* を用いるべきであるという見解を示し²⁰、詩人ラトナーカラ (Ratnākara、西暦九世紀) の叙事詩 *Haravijaya* の第一章第二詩節をその例証に引用する。

Haravijaya 1.2: jṛmbhāvīkāsitamukhaṃ nakhadarpaṇāntar-
āviṣkṛtapratimukhaṃ gururoṣaḡarbham |
rūpaṃ punātu janitāricamūvimarśam
udvṛttadaityavadhanirvahaṇaṃ harer vaḥ ||

口が開いて大きく広がり、爪という鏡面に顔の像が映り、激しい怒りを胸に秘め、敵対者達の軍勢を逡巡させ、正しい行為に背くディティの子孫(ヒラニヤカシプ)の殺害をなし遂げる、ハリ〔が権化した人獅子〕の姿が貴方様を浄めんことを²¹。

この詩節を *Caṇḍīsataka* 第51詩節と比較すると、内容と文体の点で、次のような共通点があることに気づく。(1) 悪魔の殺害を主題としていること、(2) ヴィシユヌの十の化身の一つが描かれていること、(3) 祈願文の形をとっていること、(4) 長い複合語が用いられていることである。これらの諸点を踏まえると、*Caṇḍīsataka* 第51詩節では〈憤怒〉もしくは〈勇猛〉という〈情〉が示唆されている可能性が浮上する。特に共通点(4)に挙げた長い複合語の使用は、同一子音の反復と難渋な語の使用と並び、古典詩論家達が認める三種類の〈詩的美質〉(*guṇa*)のうちの〈力強さ〉(*ojas*)を特徴づけるものの一つに数えられている。〈力強さ〉に富む文体が〈恐怖〉(*bībhatsa*)と〈憤怒〉、〈勇猛〉を示唆するのに適した文体であると詩論家マンマタが述べていることは注目されてよい²²。確かに、註釈家が文法上の不一致を問題視していないことなどを考えると、文法上の不一致を考慮せず、事物 *x* を草に喩える〈直喩〉が世間的な言語使用で用いられていたという可能性も完全には排除できない²³。しかし、詩人達が *ṛṇam iva* という表現よりも *ṛṇavat* という表現を好んで用いており、前者を詩文作品で用いる場合、文法上の一致が成立するように〈直喩〉を詩人が組み立てている例が多いことから考えて、この可能性は低いと思われる。したがって、バーナが活動した西暦七世頃には、詩節で特定の〈情〉が示唆されているという条件下で、詩文学においても問題の〈直喩〉を用いることが認められていたと考えるのが妥当であろう。クシェーメンドラはバーナに代表される詩人達の詩文作品の慣例に従って問題の〈直喩〉を第107詩節で用いたと言えよう。

²⁰*Suvṛttatilaka* 3.19ab: *vasantatilakam bhāti saṃkare vīraraudrayoḥ* | (「韻律 *vasantatilakā* は〈勇猛〉と〈憤怒〉〔という二つの〈情〉〕が混交する時、美しいものとなる。」)。

²¹アラカ (Alaka) 註からは裏付けられないが、SMITH 1985: 133 によれば、*c* 句冒頭部の *rūpa* という語には「姿」と「戯曲作品」という二つの意味が認められ、詩節中の *mukha* と *pratimukha*、*garbha*、*vimarśa* という語にも古典演劇のプロットを構成する五つの〈連結〉(*saṃdhi*)を指す術語としての意味を認めることができるという。SMITH 1985 は、ラトナーカラがこの詩節で〈連結〉に言及していることは、彼が詩作において形式の重視を意識していたことを示すものであると推定する。古典演劇論に現れる五つの〈連結〉の定義については SHASTRI 1961: 94–96 を見よ。

²²山崎 2021a を見よ。

²³文法上の不一致を考慮せず、事物 *x* を草に喩える〈直喩〉の用例はシュリーハルシャ (*Śrīharṣa*、西暦12世紀)の叙事詩美文作品 *Naiṣadhīyacarita* 第17章第58詩節にも見られる。原文は次の通りである。*Naiṣadhīyacarita* 17.58: *ṛṇānīva ghrṇāvādān vidhūnaya vadhūr anu | tavāpi tādrśasyaiva kā ciraṃ janavañcanā* || (「ちょうど、草の葉々〔を手にするの〕をやめるように、婦女達に向けて諸々の嫌悪の言葉〔を浴びせるの〕をやめよ。お前もまったく同じ(肉や関節からなる軽蔑されるべき者)であるのに、どうして、〔およそ女というものはこのように軽蔑されるべきものだと言って〕人々を長い間欺き続けるのか。」)。ここでは、「諸々の嫌悪の言葉」(*ghrṇāvādān*)が「草の葉々」(*ṛṇāni*)に喩えられており、前者の文法上の性は男性であるのに対し、後者のそれは中性である。この例は厳密には文体上の〈欠陥〉に該当しようが、次の点でクシェーメンドラとバーナの用例とは性格を異にしている。すなわち、ここでは喩えるものと喩えられるものに共通する属性(*sādharmya*)が言外に含まれている。したがって、例えば **ṛṇānīva ghrṇāvādān heyāni vidhūnaya* (「捨てられるべき草の葉々〔を手にするの〕をやめるように、諸々の嫌悪の言葉〔を浴びせるの〕をやめよ」というように、共通属性が限定句で明示され、その限定句が喩えるものと喩えられるもののいずれか一方だけを限定するという問題は起こっていない。

4 結論

以上から明らかになったことを要約すると次の通りである。

- (1) 異教徒カピラが預流果を得たことを伝える第 101–107 詩節の原文を見ると、それぞれ〈寂靜〉の〈感情喚起条件〉と〈身体表現〉を表す語である「[カピラが] 信愛を理由に平伏した」(bhaktyā praṇanāma) と「真実を見る」(satyadarśī) という語が用いられていることがわかる。
- (2) また、問題の原文を詳細に検討すると、クシェーメンドラは〈寂靜〉が示唆されている文脈に不適切な語を用いることを避けていることが判明する。
- (3) 第 107 詩節でクシェーメンドラは「海獣」(makaraḥ) と「人々の一団」(janakāyaḥ) を「草」(trṇam) に喩える〈直喩〉を用いており、喩えるものと喩えられるものの中に、詩論家達が禁止する文法上の不一致が起こっている。確かに、戯曲作品には詩論の諸規則を守ることよりも〈情〉を示唆することが重視される傾向が見られる。しかし、バーナの宗教抒情詩 *Caṇḍīsataka* には、文法上の一致を考慮せず、「草の葉」(trṇam) を「敵」(aris) に喩える〈直喩〉が使われており、主題や文体上の特徴から考えて、同詩節では〈憤怒〉と〈勇猛〉という二種類の〈情〉が示唆されている可能性が高い。このことは、遅くとも西暦七世紀以降、詩人達が詩文作品でも詩論の諸規則を守ることよりも〈情〉を示唆することを重視していたことを示す。

このことから、クシェーメンドラは第 101–107 詩節で〈適切性〉を意識し、〈感情喚起条件〉や〈身体表現〉を表す語を用いて〈寂靜〉を示唆しており、第 107 詩節では〈情〉の示唆を重視し、慣例に従い、詩論家達が規定する諸規則の枠組みに収まらない〈直喩〉を用いていると言えよう。

ここで、〈直喩〉の構成に関する諸規則と〈情〉との関係を、山崎 2021a で明らかにしたことと併せて考えると、次のようなクシェーメンドラの著作姿勢を Av-klp という作品に認めることができよう。すなわち、彼は〈直喩〉を組み立てる場合、原則、これが〈掛詞を用いた直喩〉(śliṣṭopamā) か〈空想される直喩〉(kalpitopamā) いずれかの形をとるように組み立てている。その例外となるのは、文脈で〈情〉を示唆する場合であり、この場合、〈直喩〉が問題の二つのいずれかの形をとるようにこれを組み立てることよりも、〈情〉の示唆を優先させるという著作姿勢を彼はとっている。

今後検討されるべきは、〈情〉の理論が詩文学に十分に定着する以前、仏教詩人ゴーパダッタの活動年代とされる西暦八世紀頃までに著された美文体の説話集成に見られる〈直喩〉の用例である。仏教詩人達が〈直喩〉を用いる場合、その構成に関する様々な規則をどの程度まで守ることが彼等に求められていたのかを明らかにする必要があるだろう。

付論 Av-klp 第 69 章 Dharmarājikāpratiṣṭhā 和訳研究*

以下に Av-klp 第 69 章 Dharmarājikāpratiṣṭhā (「ダルマラージカーの建立」) の和訳を試みる。同章はアショーカ王伝説を構成する章の一部であり、「八万四千塔建立伝説」と「老比丘の説法伝説」という二つの物語から構成されている。これらの物語の材源の問題については YAMASAKI 2016 で考察した。以下はその和訳篇である。和訳の底本としては DĀS and VIDYĀBHŪṢAṆA の校訂原典を用い、DE JONG 1979: 152–153 の本文批判と引田 2004 の先行訳を参照した。校合したサンスクリット写本とチベット訳は YAMASAKI 2016 で示したものと同一である。該当箇所は以下の通りで

*Av-klp のケンブリッジ大学所蔵写本 A と *Aśokāvadānamālā* のナショナル・カーカイヴズ所蔵写本、及び Av-klp のナショナル・カーカイヴズ所蔵写本 E については、複写をそれぞれ九州大学の岡野潔先生、片岡啓先生からいただいた。京都大学の横地優子先生からは第 19 詩節に関する筆者の疑問点についてご教示いただいた。広島大学の根本裕史先生からは原典の解釈に関して貴重なご助言をいただいた。また、LOKESH CHANDRA 先生 (ICCR 前副会長) からは、2016 年 3 月 17 日付の私信で、YAMASAKI 2016 に発表した dharmarājikā という語の解釈に関して重要なご示唆をいただいた。記し御礼申し上げます。

ある。A286b4–288b3; E67b1–68b6; Z465b1–468a4; D151a3–154a4; P277a6–278b5; G348b1–350b2; N247a4–248b4.

訳注は原典の解釈に関するものに限定した。本章は 31 詩節からなり、うち 26 詩節の韻律は *anuṣṭubh* である。残る五詩節の韻律の内訳は *vasantatilakā* (第 1, 36 詩節)、*mandākrāntā* (第 19 詩節)、*śārdūlavikrīḍita* (第 16, 23 詩節) である。韻律 *anuṣṭubh* の正規形 (*pathyā*) と非正規形 (*vipulā*) の内訳は次の通りである。

<i>pathyā</i>	2, 4, 5, 6, 7, 8, 9cd, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 17cd, 18, 20, 21, 22, 24cd, 25, 26, 27, 28, 29, 30cd	46	88.46%
<i>na-vipulā</i>	17ab, 24ab, 30ab	3	5.77%
<i>bha-vipulā</i>	3ab	1	1.92%
<i>ma-vipulā</i>	9ab	1	1.92%
<i>ra-vipulā</i>	3cd	1	1.92%
総計		52	100%

岡野 2005 が指摘する通り、本章を構成する詩節の大部分は、中世ネパールで編纂された説話集 *Aśokāvadānamālā* 第三章 *Aśokadamana* に引用されている。今ここに、詩節原文の改変の程度を問わず、*Av-klp* から *Aśokāvadānamālā* に一詩脚以上の引用が行われている箇所とその引用元を示すならば、次の通りである。*Aśokāvadānamālā* の対応箇所はナショナル・アーカイヴズ所蔵写本 (NGMPP Reel No. B94/7) と東京大学所蔵写本 (MATSUNAMI New No. 37) の貝葉番号と行数を指す¹。

<i>Av-klp</i> Chap. 73	NGMPP Reel No. B94/7	MATSUNAMI New No. 37
v. 6d	30b7	55b7–8
vv. 7–8	30b7–9	55b8–9
v. 9	30b11	55b12–56a1
vv. 10cd–20a	30b12–31a5	56a2–12
v. 20bcd	31a7–8	56b3–4
vv. 21cd–24	31a8–11	56b4–8
v. 25–28ab	31a11–13	56b9–12
vv. 28cd	31a13–14	56b12–57a1
vv. 29–30	31a14–31b1	57a2–3
vv. 31	31b2	57a5–6

和訳研究にあたって *Aśokāvadānamālā* 所引の詩節と引用元の *Av-klp* の詩節との対校は行っていない。これは前者の写本が後者の現存写本に見られる誤写を例外なく踏襲しているだけでなく、前者には筆写伝承過程で生じたと思われる二次的な誤写が多数見られることによる。

[1] 題辞

teṣāṃ aśeṣakuśalapraṇidhānadhāmnām
 śuddhaḥ sukhasthitir ayaṃ ca paraś ca lokah |
 yeṣāṃ viśeṣacaritonnatalakṣaṇānām
 caityāṅkitā vasumatī sukṛtaṃ bravīti || 69.1 ||

[286b4] teṣāṃ aśeṣakuśala o praṇidhānadhāmnām

¹東京大学所蔵写本については、東京大学東洋文化研究所が公開する画像データ (<http://utlsltkms.ioc.u-tokyo.ac.jp/> 最終閲覧日 2022 年 3 月 18 日午前 9 時 50 分) を参照した。

śuddhaḥ sukhaṣṭhīr ayaṃ ca paraś ca lokaḥ |
yeṣāṃ viśeṣacaritonnatalakṣaṇānām
cetyāṅkitā [5] vasumatī sukr̥tam bravīti ||

[465b1] | te śhā ma she śha ku sha la pra ṇi dhā na dhā mnā
shu ddhaḥ su kha sthī ti ra yaṃ tsa pa ra shtsa lo kaḥ |
| ye śhā mbi she śha tsa ri to nna ta la kṣha ṇā nām
tsai tyā nwi tā ba su ma tī su kri taṃ bra bī ti |

1c viśeṣacariton nata°] AEDZ (DE JONG), confirmed by Tib. *spyod pa'i khyad par*; *viśeṣaraciton nata° Ex conj. Ed. **1d** caityāṅkitā] E (Ed.); cetyāṅkitā A; caityāṅvitā DZ, Tib. has *mchod rten ldan pa'i*.

| gang zhig spyod pa'i khyad par mtho ba'i mtshan nyid ldan rnam ki |
| legs byas dag ni mchod rten ldan pa'i nor 'dzin mas smra zhing |
| ma lus dge ba'i smon lam gnas su gyur pa de dag ni |
| 'jig rten 'di dang gzhan yang dag cing bde ba brtan par gyur | 69.1 |

1a gang zhig] PGN; gang gi DZ. || kyi] PGN; kyis DZ. **1d** brtan GN; bstan DZ; brten P.

[1] およそ完全な幸福をもたらす誓願を立てることを住まう場所とする者の〔生きる〕今世と〔迎える〕来世は清浄にして樂が途切れることがない。塔廟に印づけられている大地は²、そのような、非凡な行いをなし遂げ、諸々の気高い特性をそなえた者の善行を物語っている³。

[2] 八万四千塔建立伝説

[2.1] アシヨーカ王の出現

pure pāṭaliputre 'bhūd aśokaḥ pṛthivīpatiḥ |
yenāśokaḥ kṛto lokaḥ samyakpālanalālitaḥ || 69.2 ||

pure pāṭaliputre bhūd aśokaḥ pṛthivīpatiḥ |
yenāśokaḥ kṛto lokaḥ samyakpālanalālitaḥ ||

| pu re pa ṭa li pu tre bhū da sho kaḥ pri thi bi pa tiḥ |
| ye nā sho kaḥ kri to lo kaḥ sa mya kpā la nā pā li taḥ |

2b °lālitaḥ] AE; °pālitaḥ DZ, Tib. has *bsrungs pas*.

| grong khyer pā tra li pu trar | | gang gis yang dag bskyangs bsrungs pas |
| 'jig rten mya ngan med byed pa | | sa bdag mya ngan med pa byung | 69.2 |

2a pā tra li pu trar] PGN; pa tra li pu trar DZ. **2b** gis] DZ; zhig PGN.

[2] パータリプトラという都城にアシヨーカ王が現れた。彼は正しい統治を行って人々を慈しみ⁴、彼等を憂いのない者達となした。

²サンスクリット写本は caityāṅkitā 「塔廟に印づけられる」という読みを伝える。これに対し、サンスクリット音写と Tib. は caityāṅvitā (mchod rten ldan pa'i) 「塔廟を有する」という読みを伝える。

³校訂本が推定する該当箇所を読みは *viśeṣaraciton natalakṣaṇānām 「卓越性をそなえていて、諸々の気高い特性をそなえている」である。しかし、この読みは最古のサンスクリット写本 A にも、サンスクリット音写にも、チベット訳にも支持されない。DE JONG 1979 が指摘するように、写本 A の読み viśeṣaraciton natalakṣaṇānām をとるべきであろう。

⁴DE JONG 1979 が指摘するように、d 句をサンスクリット写本が samyakpālanalālitaḥ と読んでいるのに対し、サンスクリット音写と Tib. は samyakpālanapālitaḥ と読んでいる。後者の読みをとると、°pālanapālitaḥ という形で、同音節が反復されることになるが、「統治行為で統治された」と解釈されなければならなくなり、

[2.2] 菩提樹と僧団の供養

vidhāya bodhisnapanam yena kāñcanavarṣiṇā |
tricīvarācchādanena bhikṣusaṃgho 'bhipūjitaḥ || 69.3 ||

vidhāya bodhisnapanam yena kāñcanavarṣiṇā |
tricīvarācchādanena bhikṣusaṃgho [287a1] bhipūjitaḥ ||

| bi dhā ya bo dhi mu pa nam ye na kā nytsa na ba rṣha ṇa |
| tri tshī ba rā tstsha da ne na bhi kṣhu saṃ gho bhi pū ji taḥ |

| byang chub slad du khru bsgrubs nas || gang gis gser gyi char 'bebs shing |
| chos gos gsum ni 'gebs pa yis || dge slong dge 'dun mngon par mchod | 69.3 |

3b gis] D; gi Z; zhig PGN. **3c** 'gebs] DZPN; 'gegs G. **3d** mngon par] PGN; nram par DZ.

[3] 菩提樹を潤してから、彼（アショーカ王）は黄金の雨を降らせ、三衣にするための布地〔を施すこと〕で比丘達の集団を供養した⁵。

*mānyasyānumate śrīmān yaśasaḥ sthavirusya yaḥ |
atītabuddhaśārīradhātūnāṃ dīptatejasām || 69.4 ||

mānyaḥ syānumateḥ śrīmān* yaśasaḥ sthavirusya yaḥ |
atītabuddhaśārīradhātūnāṃ dīptatejasām ||

| mā nyaḥ syā du tta maḥ shrī mā nya sha pa stha bi ra sya paḥ |
| a tī ta bu ddha sha rī ra dhā tū [466a1] nām dī pta te dza sām |

4a *mānyasyānumate] Ex conj. Ed.; mānyaḥ syānumateḥ A; mānyasyānumateḥ E; mānyaḥ syād uttamah
DZ, Tib. has *bla med* [...] *mchod byar gyur*.

| 'das pa'i sangs rgyas sku yi ni || ring bsrel gzi brjid 'bar rnam dang |
| bla med dpal ldan gnas brtan ni || grags pa de yis mchod byar gyur | 69.4 |

4b bsrel] DZPN; bsel G. **4d** yis DZ; yi PGN.

これは意味の点で冗漫である。pālanapālita という複合語の用例が見られない点も問題視されねばならない。これに対し、前者の読みは、意味の点からも、用例の点からも、支持される読みである。samyakpālanalālita という複合語の用例はハルシャ (Harṣa、西暦七世紀) の戯曲作品 *Ratnāvalī* 第一幕に見られる。

Ratnāvalī 1.9: rājyaṃ nirjitaśatru yogyasacive nyastaḥ samasto bharaḥ
samyakpālanalālitaḥ praśamitāśeṣopasargāḥ prajāḥ |
pradyotasya sūtā vasantasamayasa tvam ceti nāmnā dhṛtiṃ
kāmaḥ kāmaṃ upaitv ayaṃ mama punar manye mahān utsavaḥ ||

敵達が一人残らず征服された王国と有能な大臣に委ねられたすべての政治上の責務、賞讃されるべき庇護を通じて慈しまれてあらゆる不幸が鎮められた人々、[マガダ国王] プラドヨータの娘、春という季節、そしてお前、[これら六つを] 理由に、カーマ神は、思う存分、[マハー・ウトサヴァ (Mahotsava) という自分の異] 名に満足していればよい。しかし、「この盛大な祝祭 (マハー・ウトサヴァ) は私のものだ。」と私は思っている。

ナーラーヤナシャルマン (Nārāyaṇaśarman) 註 (19.32–33) は問題の複合語を *samyak praśastam tac ca tatpālanam rakṣanam* [...] *tena lālitaḥ vilāsitāḥ* (「[samyakpālanam という複合語は同格限定複合語であり、] 賞讃されるべき (samyak = praśastam)、彼等 (人々) を庇護する行為 (pālanam = rakṣanam) [と分析される]。それを通じて慈しまれた (lālitaḥ = vilāsitāḥ) [人々。]」) と解釈する。これを踏まえるならば、第二詩節の文脈では、「[アショーカ王が行った] 正しい統治行為を通じて慈しまれた [人々]」という形で、意味の点でも過不足なく解釈することが可能であろう。

⁵ 「三衣」(tricīvara) とは、「外衣」(saṃghāti)、「上衣」(uttarāsaṅga) と「下衣」(antaravāsaka) の三種を指す。「三衣」については佐藤 1963: 679–692 を参照せよ。

anarghāṇām ca ratnānām kṛtvā saṃgraham ādarāt |
vidadhe mauktikacchandacārucaityāṅkitām mahīm || 69.5 ||

anarghāṇāñ ca ratnānām kṛtvā saṃgraham ādarāt* |
vidadhe mauktikacchandacārucaityāṅkitām mahīm [2] ||

| a na rghā ṇām tsa ra tna nām kri twā saṃ gra ha mā da rāt |
| bi da dhe mau kti tstsha ttra tsā ru tse tyām ki tām ma hīm ||

5a anarghāṇām] ADZ; anarghyāṇām E (Ed.). 5d °cchanda°] AE (Ed.); °chattra° DZ, Tib. has *gdugs*.

| rin thang med pa'i rin chen rnam | | gus pas bsdu ba byas nas ni |
| sa gzhi mu tig gdugs mdzes kyi | | mchod rten dag gis mtshan pa bsgrubs | 69.5 |

5a rin chen] PGN; rin cen DZ. 5d mtshan pa] DZ; mtshan ma PGN.

[4–5] 吉祥なる彼(アショーカ王)は尊敬に値する上座ヤシャスの同意を得て⁶、燦然と鋭い光を放つ過去仏の遺骨と貴重な宝珠とを丁重に集め⁷、大地を〔飾られた〕真珠で魅惑的で愛されるべき塔廟に印づけられるようになった⁸。

[2.3] 龍宮訪問

nāgalokaṃ svayaṃ gatvā saugataṃ dhātusaṃcayam |
sa nāgāhṛtam ādāya ratnastūpāvalīm vyadhāt || 69.6 ||

nāgalokaṃ svayaṃ gatvā saugataṃ dhātusañcayam |
sa nāgāhṛtam ādāya ratnastū °pāvalīm vyadhāt* ||

| nā ga lo kaṃ swa yaṃ ga tvā sau ga taṃ dhā tu sa nytša ya |
| sa nā gā kri ta mā dā ya ra tna stū pā ba līm bya dhāt |

⁶サンスクリット写本とサンスクリット音写、Tib. のいずれも a 句の読みを正しく伝えない。校訂本が推定する *mānyasyānumate śrīmān という読みをとるべきであろう。対応する Tib. は bla med [...] mchod byar gyur 「無上にして〔吉祥なる上座ヤシャスを彼は〕尊敬するであろう」であり、これに基づいてサンスクリット原文を復元すると *mānyaḥ syād uttamaḥ という読みが得られる。

⁷サンスクリット写本 A とサンスクリット音写が伝える a 句冒頭部の読みは anarghāṇām である。これに対し、サンスクリット写本 E は anarghyāṇām という読みを伝え、校訂本はこれをとる。確かに anargha という語が限定詞として用いられる例の出典を PW は挙げない。この語が限定詞として用いられて「宝珠」という語を限定している用例はシャーンティデーヴァ (Śāntideva、西暦七世紀末から八世紀中頃) の *Bodhicaryāvatāra* 第一章第 10 詩節に見られる。原文は次の通りである。

Bodhicaryāvatāra 1.10: aśucipratimām imāṃ gṛhītvā jinaratnapratimām karoty anarghām |
rasajātam aṭīva vedhanīyaṃ sudṛḍham gṛhṇata bodhicittasamjñam ||

〔菩提心は、〕この不浄な容貌を引き取って、値を付けることができない、勝者という宝珠の容貌をもたらず。〔まさにこのような理由から〕「菩提心」と呼ばれる、とてもよく効く錬金薬をしっかりと保持せよ。

プラジュニャーカラマティ (Prajñākaramati) の註釈 (16.9) は anarghām という語を na vidyate argho mūlyam yasya 「価格 (argho = mūlyam) が存在しない〔容貌〕」と分析する。以上の用例とプラジュニャーカラマティの語釈を根拠に、anarghāṇām という読みをとる。

⁸c 句末のサンスクリット音写の読みは °cchattra° であり、これは対応する Tib. *gdugs* と一致する。DE JONG 1979 はこの読みが望ましいと述べる。mauktikacchattra という複合語に類似した ratnacchattra という複合語は *Avadānaśataka* 第四話 Sārthavāha (1:24.9) に見られ、FEER 1891: 34 と APPLETON 2020: 81 はそれぞれ、これを “un parasol en pierreries” と “a jewelled parasol” と解釈する。これを踏まえると、DE JONG 1979 が言うように、mauktikacchattra° 「真珠でできた天蓋」という読みが望ましいかもしれない。しかし、同様の例は、管見の及ぶ限り、見出されない。ここではサンスクリット写本が伝える読みに従う。

6a nāgalokaṃ] AEDZ (DE JONG), confirmed by Tib. *klu yi 'jig rten du*; *nāgālokaṃ Ex conj. Ed. 6d °stūpāvalīm] AEDZ (DE JONG); *°stūpāvalīn Ex conj. Ed.

| rang nyid klu yi 'jig rten du | | phyin nas bde gshegs ring bsrel tshogs |
| klu yis byin pa blangs nas de | | rin chen mchod rten 'phreng ba byas | 69.6 |

6c de] DZPN; des G. 6d rin chen] PGN; rin cen DZ.

[6] 彼は自ら龍の世界に赴き、龍が差し出した善逝の一群の遺骨を受け取り、宝珠よりなる一連の仏塔を建立した。

[2.4] 八万四千塔建立

tasyāśītisahasrāṇi catvāri ca mahītale |
dharmarājīkayuktānām stūpānām nirmītir babhau || 69.7 ||

tasyāśītisa(hasrāṇi) catvāri ca mahītale |
dharmarājīkayuktānām stūpānām nirmīti(i)r babhau |

| ta syā shī ti sā ha prā ṇi tsa twā ri tsa ma hī ta le |
| dha rmma rā dzi kaṃ yu ktā nām stū pā nām nai rmmi taṃ ba bhau |

| de yi mchod rten chos rgyal gyi | | lugs dang ldan pa stong phrag ni |
| brgyad cu rtsa bzhi dus gcig la | | sprul pa yis ni rnam par mdzes | 69.7 |

7a gyi] PGN; gyis DZ. 7d yis] DZ; yi PGN.

[7] 法の王(ブツダ)に属する〔一群の遺骨〕を安置した八万四千の仏塔という、彼が地上に造ったものは美しく輝いた⁹。

ekakṣaṇapraṭiṣṭhāsu pṛthivyām sthāviras tadā |
kham utpatyārkkam ācchādyā chāyāsamjñām akalpayat || 69.8 ||

[3] ekakṣaṇapraṭiṣṭhāsu pṛthivyām sthāviras tadā |
kham utpatyārkkam ācchādyā cchāyāsām ° jñām akalpayat* ||

⁹*Divyāvadāna* が伝えるアショーカ王伝説には *caturaśītīm dharmarājīkāśahasraṃ praṭiṣṭhāpiṣyati* 「〔アショーカ王が〕八万四千のダルマラージカーを建ててであろう」(368.28) というブツダの授記に関する一文がある。この *dharmarājīkā* という語の解釈は注意を要する。EDGERTON はこれを「法の王(ブツダ)の遺骨の供養に係る建物」、すなわち「仏塔」(*stūpa*) という意味に解釈する (BHSD, s.v., *dharmarājīkā*)。しかし、EDGERTON の解釈が正しければ、*dharmarājīkā* という女性形はありえない。LOKESH CHANDRA 2016: 246–248 は、*yatra koṭiḥ paripūryate tatra dharmarājīkāṃ praṭiṣṭāpayitavyam* 「ダルマラージカーが一千万の人口を抱える都市に建てられるであろう」(*Divyāvadāna* 381.5–6) という記述が見られることに注目し、「八万四千」という数字が仏教経典類に見られる汎称であり、計数ではないこと、ブラーフマナ文献に *iṣṭaikaśatavidha* といった表現が見られることなどを証拠に挙げ、問題の一文が意味するのは、「アショーカ王が八万四千の仏塔を建立すること」ではなく、「アショーカ王が八万四千の煉瓦 (*iṣṭakā*) からなる (巨大な) 仏塔を建立すること」であると指摘する。

翻って本詩節を見ると、「八万四千の仏塔」(*aśītisahasrāṇi catvāri [...] stūpānām*) とある。したがって、クシェーメンドラは「アショーカ王が八万四千の仏塔を建立した」と解釈していることがわかる。これは誇張表現と解釈できよう。問題となるのは *dharmarājīkā* という語である。この語は *dharmarāja* という名詞語基の後に、Pāṇini 5.2.115: *ata inīṭhaṇau* に基づいて、*taddhita* 接辞 *thaN* が起り形成される語である。したがって、*dharmarājīkayuktānām* という複合語は「法の王に属するものにふさわしい」或いは「法の王に属するものをそなえた」と解釈できよう。では「法の王に属するもの」とは何か問題になる。この場合、女性形をとっていないから、「煉瓦」と解釈することはできない。*dhātusamcaya* 「一群の遺骨」を指すと解釈すべきであろう。これに従い、「法の王(ブツダ)に属する一群の遺骨にふさわしい」と解釈する。

| e ka kṣha ṇa pra ti śhṭhā su pri thi byām stha bi ra sta dā |
| kha mu pe tya tsthā mā tsthā dya tsthā ya saṃ dznyā ma ka lpa yat |

8c utpatyārkam] A (Ed.); upetyārkam E; upetyacchām DZ. Tib. has *song nas* [...] *nyi ma* (*upetyārkam).

| dus gcig rab tu gnas pa la || de tshe gnas brtan mkhar song nas |
| nyi ma bsgrigs te sa gzhi ni || grib ma'i 'du shes dag tu brtags | 69.8 |

8b mkhar] DZ; 'khor PGN. **8d** brtags] DZ; rtags PGN.

[8] 地上に〔仏塔が〕一瞬にして建立された時、その時に上座は空中に浮上し、太陽を覆い隠して、「陰だ」という理解をもたらした(チャーヤーであるサンジュニャーを作り出した)¹⁰。

[3] 老比丘の説法伝説

[3.1] アシヨーカ王の供養を受ける老比丘

nityapravṛtte tasyātha vitate saṃghabhojane |
śanaīḥ pravrajitaḥ kaścij jarājīrṇaḥ samāyayau || 69.9 ||

nityapravṛtte tasyātha vitate saṃghabhojane |
śanaīḥ prāvrajitaḥ kaścij jarājīrṇaḥ samāya[4]yau ||

| ni tya pra bri tte ta syā tha bi ta te saṃ gha bho dza ne |
| sha naiḥ pra bra dzi taḥ ka shtsi dzdza rā dzī rṇaḥ sa mā ya yau |

9c pravrajitaḥ] EDZ (Ed.); prāvrajitaḥ A.

| de nas de yi dge 'dun gyi || mchod ston rgya che rtag 'jug la |
| rab byung rga bas 'khogs gyur pa || 'ga' zhig dal gyis 'ongs par gyur | 69.9 |

9b 'jug] PGN; 'dzugs DZ. **9c** rab byung rga bas] DZ; rang byung dga' bas PGN. **9d** gyis] DZ; gyi PGN.

[9] さて彼(アシヨーカ王)が僧団に絶えず盛大な施食を行っていた時、老いて衰弱しきつた或る出家者がおもむろにやって来た¹¹。

rājārham aśanaṃ tatra preṣitaṃ sa mahībhujā |
bhuñjanaḥ paramāṃ prītim āsāda sudhām iva || 69.10 ||

rājārham aśanan tatra preṣitaṃ sa mahībhujā |
bhuñjanaḥ paramāṃ prītim ā ○ sasāda sudhām iva ||

¹⁰引田 2004 が指摘する通り、クシェーメンドラは c 句の chāyā 「陰」と saṃjñā 「理解」という語にそれぞれ、「チャーヤー」、「サンジュニャー」という神の名を掛けている。これは *Mārkaṇḍeyapurāna* 第 77 章に説かれる太陽神スールヤの妻サンジュニャーの分身チャーヤーの物語を意図したものである。

¹¹以下に物語られる老比丘の説法伝説はこれにほぼ対応するものを、西暦 1608 年にターラナータが著した史書 *dGos 'dod kun 'byung* に見ることができる。この伝説の叙述にあてられた箇所は *dGos 'dod kun 'byung* 29.22–31.10 に相当する。

Av-klp 所収話の記事ではアシヨーカ王が僧団を供養していた理由が明示されないが、ターラナータの史書はこれを次のように伝える。*dGos 'dod kun 'byung* 29.22–30.4: gang gi tshe mchod rten zhal bsro'i don du sge slong rnams zla ba gsum du mchod pa byas la grol ba'i nyin par so so'i skyes pa'i dge slong mang po glo bur du lhags pa la rgyal pos skyed mos tshal du mchod pa chen po byas shing | de rnams kyi gral gyi thog mar 'dug pa'i dge slong rgan po zhig la hlag par yang mchod pa chen po byas so | (「その時、〔アシヨーカ王は〕仏塔の開眼式を開く目的で比丘達を三か月の間供養した。そして散会の日突然連れ立ってやって来た多くの凡夫の比丘達を王は園林で盛大に供養し、彼等の列の先頭にいた、或る老比丘を格別盛大に供養していた。」)。なお、老比丘の名を明かさないと点では、Av-klp 所収話の記事とターラナータの史書の記事は一致する。

| rā dzā rhaṃ ma sha na nta tra pre ṣhi taṃ sa ma hī bhu dzā |
| bhuṃ dzā ṇaḥ pa ra māṃ prī ti mā pa pā da su dhā mi ba |

| der ni rgyal po la 'os zas | | sa yi bdag pos rab springs pa |
| za zhing mchog tu dga' ba ni | | bdud rtsi bzhin du de yis thob | 69.10 |

10d yis] DZ; yi PGN.

[10] 王が調達させた、王にふさわしい食物を彼はその場で食べ、あたたかも甘露を得たかのように、最高の喜びを得た¹²。

[3.2] アシヨーカ王の意図を知らされる老比丘

taṃ prāhānyatamo bhikṣur api jānāsi bhūbhujā |
kimarthaṃ svocitaṃ tubhyam idaṃ bhojyam upāhṛtam || 69.11 ||

tam prāhānyatamo bhikṣur api jānāsi bhūbhujā |
kimarthaṃ svocitan tubhyam idaṃ bhojyam upāhṛtaṃ [5] ||

| tāṃ prā hā nya ta mo bhi kṣu ra pi dzā nā pi bhū bhu dzā |
| ki ma rthaṃ swo [466b1] tsi tā mi daṃ tu bhyaṃ bho dza mu dā hri tam |

11d upāhṛtaṃ] A (Ed.), confirmed by Tib. *byin pa*; udāhṛtaṃ EDZ.

| dge slong gzhan gyis de la smras | | rang la 'os pa'i bza' ba 'di |
| khyod la sa bdag gis byin pa | | ci yi don slad khyod shes sam | 69.11 |

[11] 別の比丘は彼に言った。「あなたは御存知ですか。王様が何を目的として御自身にふさわしいこの食物をあなたに差し出されたのかを。」

ativṛddhatarāt tvattaḥ saddharmaṃ śrotum utsukaḥ |
tvām arcayati bhūpālaḥ satkāreṇa mahīyasā || 69.12 ||

ativṛddhā(ta)rāt tvattaḥ saddharmaṃ śrotum utsukaḥ |
tvām arccayati bhūpālaḥ satkāreṇa mahīyasā ||

| a ti bri ddhā nta rā tva ttaḥ sa ddha rmmaṃ shro tu mu tsu kaḥ |
| tva ma tstsha ya ti bhu pā laḥ sa tkā re ṇa ma hī ya sā |

12a ativṛddhatarāt] E (Ed.); ativṛddhatarāt A; ativṛddhantarā DZ.

| shin tu rgan pa khyod nyid las | | dam chos nyan par 'dod pa yi |
| sa skyong gis ni bkur sti dag | shin tu che bas khyod la mchod | 69.12 |

12b nyan par] PGN; nyan dang DZ. || yi] DZ; yis PGN.

[12] 「非常に齢を重ねているあなたから正しい法を聴聞することを王様は強く望まれているので¹³、大いに心のこもったもてなしをして、あなたを敬っておられるのです。」

¹²この詩節で用いられている〈文体の飾り〉は「甘露」(sudhām)と「歓喜」(prītim)をそれぞれ、喩えるものと喩えられるものとする〈直喩〉であるとも解釈できる。しかしその場合、「最高の」(paramām)という語が、理論上、「甘露」という語を限定しなければならないことになり、「最高の甘露を得るように、最高の喜びを得た」という冗漫な文になってしまう。ここで用いられている〈文体の飾り〉は、非現実状況を提示する〈詩的空想〉(utprekṣā)であると解釈するのが自然であろう。

¹³saddharma という語は satām dharmāḥ 「正しい者達の法」と分析される属格限定複合語に解釈することも可能である。実際、satām dharmāḥ という語の用例は大衆部系説出世部の仏伝作品 *Mahāvastu* に見られる (*Mahāvastu* 1:131.4)。「四聖諦」(caturāryasatya) という語の例に代表される、初期仏教経典に現れる術語の意味は、榎本 2009 が指摘する通り、未確定であり、saddharma という語もその例外ではないと言える。ここでは暫定的に、saṃś cāsau dharmaś ca 「正しい法」と分析される同格限定複合語に解釈しておく。

iti smitamukhenokto bhikṣuṇā maurkhyalajjitāḥ |
śalyavidhā iva kṣipraṃ vṛddhabhikṣur acintayat || 69.13 ||

iti smitamukhenoktaḥ bhikṣuṇā maurkhyalajjitāḥ |
śalyavidhā iva kṣipraṃ vṛddhabhikṣur acintayat ||

| i ti smi ta mu khe no ktaṃ bhi kṣhu nā mau rkhya la dzdzi taḥ |
| sha lya bi dha i ba kṣhi praṃ bri ddha bhi kṣhu ra tsi nta yat |

| ces pa bzhiṅ 'dzum dge slong gis | | brjod tshe rmongs pas ngo tsha zhiṅ |
| myur du zug rṅgus phug pa bzhiṅ | | dge slong rṅgan pos rab bsams pa | 69.13 |

[13] 顔に微笑を浮かべた比丘にこのように言われると、老いた比丘は、あたかも矢に貫かれたかのように、〔自らの〕愚かさを理由にたちまち恥じ入って考えた¹⁴。

[3.3] 老比丘の苦悶

lajjāyai kim idaṃ bhuktaṃ duḥkhāntam aśanaṃ mayā |
api gāthācaturbhāgaṃ na jānāmi nirakṣaraḥ || 69.14 ||

la[287b1]jjāyai kim idaṃ bhuktaṃ duḥkhāntam aśanaṃ mayā |
api gāthācaturbhāgaṃ na jānāmi nirakṣaraḥ ||

| la dzdzā yai ki mi daṃ bhu ktaṃ duḥ khā nta ma sha na mma yā |
| a pi gā thā tsa tu r bhā gaṃ na dzā nā mi ni ra kṣa raḥ |

| ngo tsha'i slad du sdug bsngal mtha' | | zas 'di bdag gis ci slad zos |
| tshigs su bcad pa bzhi cha yang | | bdag gis mi shes yi ge med | 69.14 |

14b 'di] DZ; ni PGN. 14d gis] DZ; gi PGN.

[14] 「私が食したこの食物は苦痛を終わらせるものであったはずなのに、どうして羞恥をもたらしたのだろうか。私は読み書きができず、偈頌の一脚すら知らないのだ¹⁵。」

kiṃ karomi satāṃ madhye yadi pṛcchen mahīpatiḥ |
tat kiṃ vakṣyati mām eṣa mūkaṃ hāsyaratir janaḥ || 69.15 ||

kiṃ karomi satāṃ madhye yadi pṛcchet mahīpatiḥ |
tat kim vakṣyati mām eṣa mūkaṃ hāsyaratir jjanah ||

| kiṃ ka ro mi sa tāṃ ma dhyam ya di pri tstshe nma hī pa tiḥ |
| ta tkiṃ ba kṣhya te mā me ṣha mū kaṃ hā sya ra ti rdzdza naḥ |

¹⁴ターラナータの史書も第 12–13 詩節が伝える記事とほぼ同じ記事を伝える。原文は次の通りである。
dGos 'dod kun 'byung 30.6–10: kha zas kyi bya ba zin pa na gral 'og na gnas pa rnam kyis rṅgan po la rgyal pos khyod la lhag par bkur bsti byed pa'i rgyu shes sam dris pa na | rṅgan pos mi shes so byas so | | de rnam kyis 'di ni kho bo cag gis shes te da lta nyid du rgyal po chos nyan par 'dod nas 'ong ste | khyed kyis chos ston dgos so | | der dge slong rṅgan po de gnad du phog pa bzhiṅ gyur | (「施食の務めが終わった時、最後列にいた者達が老〔比丘〕に『王が貴殿を格別丁重にもてなした理由を御存知か。』と尋ねると、老〔比丘〕は『知らない。』と答えた。彼等は『まさしくそ〔の理由〕を我々は知っている。すなわち王はたった今、法を聴聞しようとして来たのであり、貴殿は法を説かなければならないのです。』と。するとその老比丘は急所を突かれたかのようにになった。」)。

¹⁵ターラナータの史書が伝える記事では、老比丘がアショーカ王の意図を知らされる以前に、彼が無知であったことが物語られる。*dGos 'dod kun 'byung* 30.4: dge slong rṅgan po de ni thos pa nyung ba shin tu blun pa | (「その老比丘は学識に乏しく、非常に愚かな者であった。」)。

| dam pa'i dbus su sa bdag gis | | gal te dris na bdag ci byed |
| skye bo dga' zhig rgod 'di dag | lkugs pa bdag la ci brjod 'gyur | 69.15 |

15b na DZ; nas PGN. **15c** dga' zhing rgod] PGN; 'ga' zhig dgod DZ. ||

[15] 「優れた人々の間で私は何をなそうか。もし王が〔私に法について〕尋ねるとすれば、この方は黙っている私に何と云うだろうか。人は笑いの的に歓喜を覚えるものだ¹⁶。」

kītaiḥ koṭarakāribhir vighaṭitaskandhaprabandhaḥ śanair
*antaḥsuptakṛṣānudhūmamalinaḥ śvabhre 'pi dhanyas taruḥ |
mūrkhah paṇḍitakhaṇḍitānanarucir vailakṣyalīnasthitih
mūkāndhapratimāḥ pramādasatir mā māstu mādr̥gjanah || 69.16 ||

kītaiḥ [2] koṭarakāribhir vighaṭitaskandhaprabandhaḥ śanair
antaḥsuptakṛṣānudhūma ◦ malineḥ śvabhre pi dhanyas taruḥ |
mūrkhah paṇḍitakhaṇḍitānanarucir vailakṣyalīnasthitir
mūkāndhapratimāḥ [3] pramādasatir mmā māstu mādr̥gjanah ||

| kī taiḥ ko ṭa ra kā ri bhi rbi gha ṭi ta stha nda pra ba ndhaḥ śa nai
ra ntaḥ su pta kri shā nu dhū ma ma li na shwa bhre pi dha nya sta ruḥ |
| mū rkhaḥ pa ṇḍi ta kha ṇḍi tā na na ru tsi rbai la kṣhya lī na sthi te
mū kā ndha pra ti maḥ pra mā da ba pa ti rmmā ma stu sā dri gha naḥ |

16b *◦malinaḥ] Ex conj. Ed.; ◦malineḥ A; ◦maline E; ◦malina DZ. **16c** mūrkhah] ADZ (Ed.); mūkaḥ E.

| srin bu khong stong byed pa rnams kyis dal gyis sdong po'i rgyun ni gzhigs gyur cing |
| nang du me dag nyal zhing du bas dri mar gyur pa g.yang sa'i shing yang sla |
| mkhas pa bzhin ras mdzes pas bcom pa'i rmongs pa skyengs shing zhum pas gnas gyur pa |
| lkugs shing long ba'i gzugs brnyan bag med du gnas skye bo bdag 'drar ma gyur cig 69.16 |

16a gyis] DZ; gyi PGN. **16b** g.yang] DZ; g.yangs PGN (also correct). **16d** lkugs shing] DPGN; lkug cing Z. || gzugs brnyan] PGN; gzugs can DZ.

[16] 穴を穿つ習性のある昆虫達によって一続きの幹をゆっくりと蝕まれ、割れ目の中で眠っているアグニ神が発する煙で汚れていても、樹木は富をもたらす。愚かであり、教養ある者達の面前で顔の色つやが損なわれ、ずっと羞恥に付きまといわれたままで、ものを言うこともできなければ、ものを見ることもできない者に等しい私のような者は無思慮のすみか以外の何物でもないに違いない¹⁷。

¹⁶cd 句は少なくとも二通りに解釈可能である。cd 句を一文と考えるならば、「笑いの的に歓喜を覚えるこの人（アショーカ王）は黙っている私に何と云うだろうか。」と解釈できよう。d 句の hāsyaratir janah を一般論を表す独立した文と考えるならば、「この方は黙っている私に何と云うだろうか。人は笑いの的に歓喜を覚えるものだ」と解釈できよう。後者の場合、hāsyaratā janāḥ という総称複数形をとっていない点に疑問が残るが、前者の場合、アショーカ王が「笑いの的に歓喜を覚える」理由が明確に説明されえない。ここでは後者をとる。

¹⁷pramādasatir [...] mādr̥gjanah (Tib. bag med du gnas skye bo bdag 'dra[r]) 「私のような者は無思慮のすみかである」という表現でクシェーメンドラが意図するのは「私は完全に思慮に欠ける者だ」ということであろう。これは、sa guṇāspadam 「彼は諸々の美質を宿す場所である」という表現に類した、一種の〈隠喩〉(rūpaka) と思われる。pramāda 「思慮のなさ」という語がここで含意するのは「アショーカ王から説法の見返りを求められているにもかかわらず、老比丘がそのことに気づかず饗宴にあずかってしまったこと」であろう。

[3.4] 女神の助言

iti cintāparicitaṃ *taptaniḥśvāsaniḥsukhaṃ |
buddhaprasādinī devī samabhyetya jagāda tam || 69.17 ||

iti cintāparicitaṃ taptaniśva ° saniḥsukhaṃ |
buddhaprasādinī devīm samabhyetya jagāda tam* ||

| i ti tsi ntā pa ri tsi te ta pta ni shwa sa niḥ su khaṃ |
| bu ddha pra sād i [467a1] ni de bī ma bhye tya dza gā da taṃ |

17b *°niḥśvāsa°] Ex conj. Ed.; °niśvasa° ADZ; °niśvāsa° E.

| de lta bsams pa yongs 'dri shing | | tsha ba'i dbugs 'byin bde med pa |
| de la lha mos sangs rgyas la | | rab dang mngon du phyogs te smras | 69.17 |

17a bsams pa] DZ; bsam pa PGN. **17c** de la] DZPN; de las G. **17d** smras] PGN; gnas DZ.

[17] このように〔考えて〕、不安でいっぱいになり、重苦しくため息をついてふさぎこんでいる彼に近づいて、覺者に対して淨心を抱いている女神は言った。

prakṣyati tvāṃ yadā rājā vaktavyaṃ bhavatā tadā |
vistīrṇataradharmasya saṃkṣepaḥ śrūyatām iti || 69.18 ||

prakṣyati tvāṃ yadā rājā vaktavyam bhavatā tadā [4] |
vistīrṇataradharmmasya saṃkṣepaḥ śrūyatām iti ||

| pra kṣhya ti twaṃ ya dā rā dzā ba kta byaṃ bha ba tā ta dā |
| bi stī rṇa ta ra dha rmmā sya saṃ kṣhe paḥ shrū ya tāṃ iti |

| gang tshe khyod la rgyal po 'dri | | de tshe khyod kyis 'di brjod bya |
| shin tu rgya che ldan pa'i chos | | mdor bsdus pa dag nyan par mdzod | 69.18 |

18b kyis] DZ; kyi PGN. **18c** ldan pa'i] ZPGN; bden pa'i D. **18d** nyan par] DZ; mnyan par PGN.

[18] 「王様があなたにお尋ねになるであろう時、あなたはお語り下さい。『法はその内容があまりに広範囲に及ぶものですから、どうか、その綱要をお聞き下さい。』と¹⁸。」

[3.5] 法の綱要

kiṃcinmātraṃ dhanam upakṛtau kṛtyam abhyarthyam eva
prāṇādhāraṃ tanutaram api svādanirmuktam annam |

¹⁸ターラナータの史書が伝える記事も Av-klp が伝えるそれとほぼ同じである。しかし、老比丘に知恵を授けるのが Av-klp 所収話の記事では「女神」(devī) であるのに対し、ターラナータの史書の記事では「その森に棲む神」(tshal de la gnas pa'i lha) である。また Av-klp 所収話の記事では、女神が老比丘にアショーカ王に向かって何を教示すべきか助言したのか明確に物語られない。これに対し、ターラナータの史書の記事では、神が一切が無常であることを教示するよう老比丘に助言したことが物語られる。dGos 'dod kun 'byung 30.13–17: tshal de la gnas pa'i lhas gal te rgyal po dge slong 'di la ma dad par gyur na mi rung ngo snyam nas sprul pa'i gzugs kyis dge slong de'i mdun du 'ongs nas | rgyal po chos nyan du byung na | rgyal po chen po sa gzhi ri dang bcas pa 'di yang 'jig par 'gyur na | rgyal po'i rgyal srid ni lta ci smos te | rgyal po chen po 'di nyid bsam par rigs so zhes smros shig ces zer | (「その森にいる神は『王がこの比丘に淨心を抱かないようなことはあってはならない。』と考え、姿を変えてその比丘の面前にやって来て、『王が法を聴聞しに現れたならば、『大王様、山を有するこの大地すら滅する運命にあるならば、まして王権ならばなおさらです。大王様、まさにこのことをお考え下さい。』と述べよ。』と告げた。))。

nidrāmudrā kṣaṇam api dṛṣor ity aśaktopayuktaṃ
śeṣaṃ tyaktvā vrajati vipulārambhabhogam śārīrī || 69.19 ||

kiñcinmātraṃ dhanam upakṛtau kṛtyam abhyarthya eva
prāṇādhāraṃ tanutaram api svādanirmuktam annaṃ |
nidrāmudrā kṣaṇam api dṛṣor ity a[5]śaktopayuktaṃ
śeṣaṃ tyaktvā vrajati vipulārambhabhogam śārīrī ||

| kiṃ tsi nmā traṃ dha na mu sa kri tau kri tya ma tya ndhya me ba
prā ṇā dhā rā ta nu ta ra ma ti swā da ni rmu kta ma nnaṃ |
| ni drā mu drā kṣha ṇa ma pi dri sho ri tya sa kto sa mu ktaṃ
she ṣhaṃ tya ktwā bra dza ti bi pu lā raṃ bha bho gaṃ sha rī rī |

19a abhyarthya] AE (Ed.); atyandhyam DZ, Tib. has *shin tu nyung pa* (*atyalpam).

| nor ni cung zad tsam zhig phan pa byed cing bya ba shin tu nyung ba nyid |
| srog gi zungs na shin tu chung zhing ro dang bral ba'i zas kyis kyang |
| mig dag gnyid kyī rgya ni skad cig gis kyang 'di nyid rgyun du ni |
| nyer mkho lhag ma btang nas lus can longs spyod rtsom pa rgya cher 'gyur | 69.19 |

19b zungs na] D; zungs ni Z; gzungs ni PGN. **19d** nyer mkho] DZ; nye mkho PGN.

[19] 「〔他者を〕援助するために本当に必要とされるほんの僅かな資産と〔自分が〕実現できる行為、風味を欠き相当に僅かであっても命の支えとなる食物、一瞬の間でも両眼を閉ざしめる睡眠という封印、以上のような、力のない者ですら楽しむことのできる、〔手に入れるために努力を必要とするもの〕以外のものを捨てて、人は途方もないことを企てては享受をなそうとします¹⁹。」

[3.6] 老比丘の説法

iti devyā samādiṣṭo vṛddhaḥ spaṣṭatarasvaraḥ |
śrotuṃ prāptasya bhūbhartur vidadhe dharmadeśanām || 69.20 ||

iti devyā samādiṣṭo vṛddhaḥ spaṣṭatarasvaraḥ |
śrotuṃ prāptasya bhūbhartur vidadhe dharmadeśanām ||

| i ti de byā sa mā di ṣṭā bri ddhaḥ ya ṣṭa ta ra swa raḥ |
| shro tuṃ prā sta sya bhu bha rttu rbi da dhe dha rmma de sha nām |

| zhes pa lha mos yang dag bstan | | rab gsal dbyangs can rgan po yis |
| sa bdag nyan du 'ongs pa la | | chos ni rab tu bstan pa mdzad | 69.20 |

[20] このように女神に指示されたので、老〔比丘〕はとてもはっきりとした声を出して、〔法を〕聞こうとしてやって来た王に法を教示した。

rājā hṛdayasamvādi śrutvā tasya subhāṣitaṃ |
acintayad aho satyam idam uktaṃ manīṣiṇā || 69.21 ||

rājā hṛdayasamvādi śrutvā tasya [288a1] subhāṣitaṃ |
acintayad aho satyam idam uktaṃ manīṣiṇā ||

¹⁹該当詩節は第23詩節と内容の上で関連する。第23詩節の内容から考えて、ここでは「資産」(dhana)と「実現できる行為」(kṛtya)、「食物」(anna)、「睡眠」(nidrā)という四つの事物が列挙されているはずである。したがって、a句のkiñcinmātraṃとupakṛtau、abhyarthyaという語は、dhanamとkṛtyamという語の両方を限定していると解釈すべきであろう。

| rā jā hri da ya saṃ bā di shru twā ta sya su bhā ṣhi taṃ |
| a tsi nta ya da ho sa tya mi da mu ktaṃ mā nī ṣhi nā |

| snying la 'bab pa de yi ni | | legs bshad rgyal pos thos gyur nas |
| kye ma mkhas pas brjod gyur pa | | 'di ni bden zhes rab tu bsams | 69.21 |

21a 'bab pa] PGN; bab pa DZ. **21c** mkhas pas] PGN; mkhas pa DZ.

[21] 心の琴線に触れる、彼の秀でた言葉を聞いて、王は「ああ、師が仰ったこのことは真実だ。」と考えた。

*mām evaitat samuddiśya hitam āha mahāmatih |
tattvasaṃvādasāsvādāḥ puṇyaprāpyāḥ satāṃ girah || 69.22 ||

māmaivaitat samuddiśya hitam āha mahāmatih |
tatvasaṃvādasāsvādāḥ puṇyaprāpyāḥ satāṃ girah ||

| ma ma bai tat sa mu ddhi shya hi ta mā ha ma hā ma tiḥ |
| ta twa ba swā da sā swā dāḥ pu ṇya prā pyāḥ sa tāṃ gi rah |

*mām evaitat] Ex conj.; māmaivaitat AE (Ed.); mamavaitat DZ.

| blo gros chen pos bdag nyid kyi | | ched du phan pa 'di dag gsungs |
| de nyid brjod pa dam pa'i tshig | nyams myong bsod nams dag gis thob | 69.22 |

22a kyi] DPGN; kiyis Z. **22d** thob] DZ; 'thob PGN.

[22] 「偉大な知性を持っておられる方が、他ならぬ私に向けて、このようなためになることをお語りになっているのだ。およそ優れた人が発する真実にかなっていて滋味ある言葉というものは、諸々の徳ある行いを通じて得ることができるものなのだ²⁰。」

yat koṣeṣu nidhīyate dhanavanaṃ trṣṇānalasyendhanaṃ
kṛtyaṃ yac ca catuḥsamudrarasanāṃ vyāpnoti viśvaṃbharāṃ |
āhāro 'pi vicitratāparicayī nidrāpi me bhūyasī
sarvaṃ mohasukhāya nāntasamaye kiṃcit kvacid dṛśyate || 69.23 ||

yat koṣeṣu nidhīyate dhanavanaṃ [2] trṣṇānalasyendhanaṃ
kṛtyaṃ yac ca catuḥsamudrarasanāṃ vyāpnoti viśvaṃbharāṃ |
o āhāro pi vicitratāparicayī nidrāpi me bhūyasī
sarvaṃ mohasukhāya nāntasamaye kiṃcit kva[3]cid dṛśyate ||

| ya tko she ṣhu ni dhī ya te dha na ba naṃ dri ṣṭrā na la sye ndha naṃ
kri tyam ya tsta tsa tuḥ sa mu dra ba sa nām [467b1] byā sno ti bi shwaṃ bha rām |
| a hā ro pi bi tsi tra tā pa ri tsi bī ni drā pi me bhū ya sī
sa rbbam mo ha su khā ya nā nta sa ma ye kiṃ tsi tkwa tsi ddri shya te |

23c nidrāpi me] ADZ (Ed.); nidrā me E (unmetrical).

| gang zhig mdzod rnam su ni me yi bud shing du mthong nor gyi nags dag bsgrubs |
| gang yang bya bas rgya mtsho bzhi yi gos can sna tshogs 'dzin pa khyab par byas |
| zas kyang rnam par bkra la yongs su 'dris shing bdag gi gnyid kyang shin tu che |
| thams cad rmongs pa'i bde slad mjug gi dus su gang du ci yang mthong ma yin | 69.23 |

²⁰d 句の「徳ある行い」(puṇya)の主体が何なのか文脈からは判断し難い。二通りの解釈が可能であろう。第一は「アショーカ王」であるという解釈、第二は「善き人」であるという解釈である。

23a gang zhig] PGN; gang gi DZ. 23b yi] DZPN; yis G. 23c gi] DZPN; gis G. 23d mjug] DZ; 'jug PGN.

[23] 「宝物庫に収められているのは飢えという火の燃料である資産という森だ。〔私が〕実現できる行為は四方の海を帯とする大地の隅々にまで及んでいる。私が摂る食物も多彩に富んでいるし²¹、私がとる睡眠も十二分だ。〔しかし、〕ありとあらゆるものは心の迷いを原因とする楽をもたらすのだ。命が終わりを迎える時、〔人は〕いかなる場所でも、何も見ることはないのだ。」

[3.7] 衣を施すアシヨ一カ王

iti saṃcintya nr̥patis tasmai kāñcanacarcitam |
praṇāmya pradadau cāruruci saccīvarāṃśukam || 69.24 ||

iti sañcintya nr̥patis tasmai kāñcanacarcitam |
praṇāmya pra o dadau cāruruci saccīvarāṃśukam ||

| i ti saṃ tsi ntya nri pa ti sta smai kā nytsa na ba rttsa taṃ |
| pra ṇa mya pra da dau tsā ru ru tsi ma tstsī ba rāṃ shu kaṃ |

| zhes bsams mi yi bdag po yis || de la rab tu phyag 'tshal te |
| 'od ldan mdzes pa'i chos gos ni || gser gyis rab tu spras pa phul | 69.24 |

24a bsams mi yi bdag po yis] DZ; bsam mi yis bdag po yi PGN.

[24] 王はこのように熟考して、彼にひざまずいて、黄金をかぶせた、美しく輝いていて上等な、衣にするための布地を差し出した。

vrajaṅtam atha mārgē rājavūjāvīrājītam |
dhyānādhyayanayogāya devatā samacodayat || 69.25 ||

²¹paricaya という語は、「人」を〈行為主体〉(karṭṛ)として、「xに通曉していること」という行為名詞として用いられるのが一般的である。ここでは、同じ語が「物」を〈行為主体〉として、「xを有する」という意味で用いられていることに注意すべきである。これに類した用例はカシミールの詩人マンカ(Maṅka、西暦12世紀)のŚrīkaṅṭhacarita 第23章第18詩節に見られる。原文とそれに対するジョーナラージャ(Jonarāja)の註は以下の通りである。

Śrīkaṅṭhacarita 23.18: haṭhakaṭhinaviṭaṅkākīkasaskhalitaniśātavipakṣasādhakam |
kavacaparicayānapekṣatām abhajata bhṛṅgiriṭer aho vapuḥ ||

先が鋭く尖っているにもかかわらず、敵達が放つ諸々の矢は、とても固くて高く聳え立っている諸々の骨〔に当たって〕から落ちているので、プリンギリティの体は、ああ、鎧を身に着けることに依らなくとも問題なくなっている。

Jonarāja on Śrīkaṅṭhacarita 23.18 (314.13–16): bhṛṅgiriṭer gaṇaviśeṣasya vapur dehaḥ kavacagrahaṇānapekṣatām apekṣārahitatvam abhajata | yato haṭhenātimātram kaṭhināni viṭaṅkāny unnatāni kīkasāny asthīni tebhyaḥ skhalitā niśītās tīkṣṇā api śatruśarā yatra tat | kīkasair eva kaṅkaṭakṛtyasya śaranivāraṇasya sampādanāt | devyavagaṇanād dhi bhṛṅgiriṭer asthimātraśarārah ||

プリンギリティ、つまりシヴァの眷属達の一人の体(vapur = dehaḥ)は鎧を着ることに依らなくとも問題なく(anapekṣatām = apekṣārahitatvam)なっている。というのも、とても(haṭhena = atimātram)固くて高く聳え立っている(viṭaṅkāni = unnatāni)諸々の骨(kīkasāni = asthīni)から、先が鋭く尖っている(niśītāh = tīkṣṇāh)にもかかわらず、敵達が放った諸々の矢が〔当たって〕落ちている体をしているからである。じつに諸々の骨が、鎧がないうる、矢の防御を実現しているからである。じつに、チャンディーに対して不遜な態度をとったので、プリンギリティは骨だけの体をしているのである。

ここでは paricaya という語が grahaṇa 「身に着ける行為」という語で言い換えられており、grahaṇa という語で表示される行為の〈行為主体〉は vapuḥ 「体」である。この用例に照らせば、paricaya という語が、「物」を主語として、「xを有する」という意味で用いられる慣例があり、これにクシェーメンドラが従ったと考えることができよう。

vrajantam atha tammārgge rājavūjāvīrājitaṃ |
dhyānādhyayanayogāya [4] devatā samacodayat* ||

| bra dza nta ma tha taṃ mā rge rā dza pū dzā bi rā dzi taṃ |
| dhyā nā dhyā ya na yo gā ya de ba tā pa ma tso da yat |

| de nas lam du 'gro byed cing || rgyal po'i mchod pas mdzes pa de |
| bsam gtan kha ton sbyor ba'i slad || lha mo yis ni yang dag bskul | 69.25 |

25a 'gro] DZ; bgrod PGN. 25d yis] DZ; yi PGN.

[25] さて、女神は、王の供養を受けたことで誉れ高い者となり、道の上を歩いていた〔老比丘〕が精神集中と学習、修行実践〔を行う〕ために手助けをした²²。

[3.8] 老比丘の阿羅漢果獲得

tatas tadupadeśena nikhilakleśasaṃkṣayāt |
sākṣādvihitam arhattvaṃ tena dhyānāvadhānīnā || 69.26 ||

tatas tadupadeśena nikhilakleśasaṃkṣayāt* |
sā o kṣād virahitam arhatvan tena dhyānāvadhānīnā ||

| ta ta sta du pa de she na ni khi la kle sha saṃ kṣha yāt |
| pā kṣa dbi hi ta ma rha twaṃ te na dhyā nā ba dha ni nā |

| de nas de yi man ngag gis || de yis bsam gtan bsgrubs pa na |
| nyon mongs ma lus zad pa las || dgra bcom nyid ni mngon du bsgrubs | 69.26 |

26b de yis] DZ; de yi PGN.

[26] それから、彼女の教示によって、彼は精神統一に集中し、ありとあらゆる煩惱が消滅し尽くしたので、阿羅漢果を現証した²³。

²²dhyānādhyayanayoga という複合語は「精神統一と学習を実践するための努力」とも解釈可能である。しかし、問題の複合語は仏教文献では通常、「精神統一と学習、修行実践」（聞思修）と解釈され、集合を表す並列複合語（samāhāradvamdva）として用いられる。その一例として、以下の根本説一切有部の律蔵の「破僧事」の一節を挙げることができよう。Saṃghabhedavastu 2:3.18–19: te vārāṇasīm praviśya piṇḍapātaṃ caritvā punar api karakacchedakam parvataṃ gatvā **dhyānādhyayanayogenāvasthitāḥ**（「彼等はヴァーラーナシー〔の都城〕に入り、乞食をなし、そしてさらに、カラカチューダカ山に行き、精神統一と学習、修行実践を続けていた。」）。これに対応する Tib. も問題の複合語を並列複合語として訳出する。D NGA 111a2–3; P CE 106a4–5; N NGA 173b6–7; S NGA 146a2–3: de rnam s bā rā na sīr zhugs nas bsod snyoms spyad de slar yang ri bo ril ba'i dbyibs la dong nas **bsam gtan dang | klog pa dang | rnal 'byor gyis** gnas pa na [...]（「彼等はヴァーラーナシーに入り、乞食をなし、そしてさらに、クンダーカーラ（ril ba'i dbyibs = kuṇḍākāra）山へ行って、精神統一（**bsam gtan = dhyāna**）と学習（**klog pa = adhyayana**）、修行実践（**rnal 'byor = yoga**）を続けていた。」）。したがって、クシェーメンドラがこの複合語を仏教の術語として用いている可能性はあろう。ここでは集合を表す並列複合語として解釈する。

²³ターラナータの史書の記事は、老比丘が阿闍梨のもとで教えを受けた後、阿羅漢果を得たことを伝える。dGos 'dod kun 'byung 30.20–31.1: de nas yang tshal gyi lha des dge slong rgan po khyod dang pa can gyis byin pa'i rdzas chung ma zos par gyis shig || des kyang slob dpon la gdams ngag zhus te rtsi gcig tu bgsoms pas zla ba gsum nas dgra bcom pa thob ste sum cu rtsa gsum gyi gnas yongs 'du sa brtol gyi tshal du dbyar gnas par byas te |（「それからまた、その森の神は『老比丘よ、お前は浄心を抱いていない者が差し出した物品は取るに足らないようなものであれ、享受してはならない。』〔と述べた〕。彼はまた、阿闍梨のもとで教えを請い、三か月の後、阿羅漢果を得て、三十三天のパーリヤートラカ樹の森で雨安居を行った。」）。

[3.9] 天界で雨安居を行った新参比丘の来訪

kadācid atha bhūhartur vipule saṃghabhōjane |
navaḥ samāyayau bhikṣur divyasaurabhacīvaraḥ || 69.27 ||

kadācid atha bhūhartur vipule saṃghabhōjane |
navaḥ samā[5]yayau bhikṣur ddivyasaurabhacīvaraḥ ||

| ka dā tsi da tha bhū bha rtu rbbi pu le saṃ gha bho dza ne |
| na baḥ sa mā ya yau bhi kṣur di bya sau ra bha tsī ba raḥ |

| de nas nam zhig sa bdag gi | | dge 'dun mchod ston yangs pa la |
| dge slong chos gos lha yi ni | | dri bzang ldan pa gsar du 'ongs | 69.27 |

27a gi] PGN; gis DZ.

[27] さて或る時、王が僧団を食事で盛大にもてなしていた時、神々しい芳香を放つ衣をまとった新参比丘がやって来た²⁴。

apūrvagandhalubdhālimālāvalayitaṃ nṛpaḥ |
tam apr̥cchat kutas tāvad ayaṃ te saurabhodbhavaḥ || 69.28 ||

apūrvagandhalubdhālimālāvalayitaṃ nṛpaḥ |
tam apr̥cchat kutas tāvad ayan te saurabhodbhavaḥ ||

| a pū rba ga ndha lu bdhā ni mā lī ba la yi taṃ nri paḥ |
| taṃ ma pri tstsha tku ta stā ba da yaṃ te sau ra bho da bha baḥ |

| sngon med dri la chags pa yi | | bung ba'i 'phreng bas bskor de la |
| mi bdag gis dris khyod kyi dri | | rgyas 'di re zhig gang las byung | 69.28 |

28b. 'phreng bas] DZ; phreng bas PGN (also correct). || bskor de] DZPN; bskor ba G. 28c khyod kyi dri] DZ; khyod kyi dris PGN.

[28] いまだかつてないかぐわしい香りを貪る蜂の群れに取りまかれている彼に王は尋ねた。「あなたの芳香は一体全体、どこからこのように生まれて来ているのか。」と。

so 'vadaḥ devaloke 'haṃ pārijātataros tale |
uṣīto vārṣikaṃ kālāṃ tatpuṣpair adhvīāsitaḥ || 69.29 ||

so vadaḥ devaloke haṃ pārijātataros tale |
uṣīto vārṣikaṃ [288b1] kālāṃ tatpuṣpair adhvīāsitaḥ ||

| po ba da de ba lo ke haṃ pā ri dzā ta ta ro sta le |
| u ṣhi to bā rṣhi kaṃ kā laṃ ta tpu ṣpai ra [468a1] dhi ba pi taḥ |

| des smras lha yi 'jig rten gyi | | yongs 'du ljon pa'i 'og tu bdag
| dbyar gyi dus su gnas gyur pa | | de yi me tog dag gis bsgos | 69.29 |

29b yongs 'du] ZPGN; yangs 'du D.

[29] 彼は言った。「神々の世界にある、パーリジャータ樹の根元で私は雨季を過ごしていたので、その樹の花々の匂いが移ったのです。」

²⁴以下に物語られる、天界で雨安居を行った比丘の物語の主人公が誰であるかという点で、Av-klp 所収話の記事はターラナータの史書の記事と一致しない。前者では問題の比丘が「新参比丘」(navaḥ [...] bhikṣur) であるのに対し、後者ではこの比丘は無知な老比丘と同一人物である。詳細については、YAMASAKI 2016 を見よ。

etad ākarṇya nṛpatis tatprabhāvādhikādarah |
ratnatrayārcanāsaktaḥ puṇyārāmarato 'bhavat* || 69.30 ||

etad ākarṇya nṛpatis tatprabhā(vādh)ikādarah |
ratnatrayārccanāsaktaḥ puṇyārāmarato 'bhavat ||

| e ta dā kā rṇya nri pa ti sta ta pra bha bā dhi kā da rah |
| ra tna tra yā tstsha na pa ktaḥ pu ṇyā rā ma ra to bha bat |

| de thos mi bdag de yi ni | | mthu la lhag par gus gyur cing |
| dkon mchog gsum mchod la chags pa | | bsod nams kun rar dga' bar gyur | 69.30 |

30c dkon mchog] PGN; dkon cog DZ.

[30] 以上のことを聞いて、王は彼が持っている神的な力に殊の外尊敬の念を抱き、三宝を敬うことに絶えず心に向け、徳ある行いという園林に喜びを覚える者となった。

[4] 物語総括

dharmasthitipraṇayinī yadi saiva vṛttiḥ
satyopabhogasubhagā yadi saiva vānī |
paryantacintanaratā yadi saiva buddhir
*dānakriyopakaraṇā yadi saiva lakṣmīḥ || 69.31 ||

dharmasthitipraṇayinī yadi saiva vṛttiḥ
satyopabhogasubhagā yadi saiva vā[2]nī |
paryantacintanaratā yadi saiva buddhir
ddānakriyopakaraṇam yadi saiva lakṣmī o ḥ || × ||

| dha rma sthi ti pra ṇa yi nī ya di sai ba bri ta tiḥ
sa tyo pa bho ga su bha go ya di sai ba bā nī |
| pa rya na ta tsi nta na ra tā ya di sai ba bu ddhi
rdā na kri yo pa ka ra ṇam ya di sai ba la kṣmīḥ |

31d *dānakriyopakaraṇā] Ex conj. *dānakriyopakaraṇam AEDZ (Ed.).

| gal te gus par chos la gnas na de nyid 'tsho ba yin |
| gal te skal bzang bden par spyod na de nyid smra ba yin |
| gal te mthar thug sems par byed na de nyid blo gros yin |
| gal te sbyin pa'i bya ba byed na de nyid dpal 'byor yin | 69.31 |

31a gnas] DZ; dga' PGN.

[31] もし法が継承されて行くことを求める女がいるとすれば、行いが彼女に他ならない。もし真実を楽しむという幸福をもたらす女がいるとすれば、言葉が彼女に他ならない。もし究極的なものを思考するのを喜ぶ女がいるとすれば、知性が彼女に他ならない。もし布施という行いを手助けする女がいるとすれば、資産が彼女に他ならない²⁵。

²⁵d 句の yadi という語に率られる複文の主語の読みは dānakriyopakaraṇam であり、この読みは、チベット訳からは判断し難いが、サンスクリット写本からも、サンスクリット音写からも支持される。しかし、abc 句の yadi という語に率られる複文の主語がいずれも、主格・単数・女性の形を取っていることに注意すべきである。この点を考慮するならば、d 句の従属節の主語の読みは *dānakriyopakaraṇā と訂正されるべきであろう。

この詩節では、「行い」(vṛtti) と「言葉」(vānī)、「知性」(buddhi)、「財産」(lakṣmī) という四つの女性名詞が擬人化されている。これら四つがそれぞれ、法の継承と真実を楽しむこと、究極的なもの(縁起説或いは四聖諦)の思考、布施を可能にするという趣旨のことをクシェーメンドラは言っていると思われる。

iti kṣemendraviracitāyām bodhisattvāvadānakalpalatāyām dharmarājikāpratiṣṭhāvadānam ūna-
saptatitamaḥ pallavaḥ ||

iti kṣemendraviracitāyām bodhisattvāvadānakalpalatāyām dharmmarājikāpratiṣṭhāvadānam ūna-
sa[3]ptatitamaḥ ||

| i ti kṣhe me ndra bi ra tsi tā yām bo dhi sa twā ba dā na ka lpa la tā yām dha rmma rā dzi kā pra ti ṣṭhā ba dā
naṃ mū sa pta ti ta maḥ pa lla waḥ ||

Colophon pallavaḥ] EDZ (Ed.); om. A.

| zhes pa dge ba'i dbang pos byas pa'i byang chub sems dpa'i rtogs pa brjod pa dpag bsam gyi 'khri
shing las chos kyi rgyal po rab gnas kyi rtogs pa brjod pa'i yal 'dab ste drug cu rtsa dgu pa'o |

以上、クシェーメンドラによって著された『菩薩伝の願望成就の蔓草』中の「ダルマラジカーの建立伝説」という名の第 69 章了。

参考文献

(1) 一次文献

- Aucityavicāracarcā* “Mahākaviśrīkṣemendrakṛtā aucityavicāracarcā.” In *Kāvyamālā: A Collection of Old and Rare Sanskrit Kāvya, Nātakas, Champūs, Bhāṇas, Prahāsanas, Chandas, Alankāras &c.*, ed. Mahāmahopādhyāya Paṇḍit DURGĀPRASĀD and Kāśīnāth Pāṇḍurang PARAB, 115–160. Part I. Bombay: Nirṇaya Sāgar Press, 1886.
- Avadānakalpalatā Avadāna Kalpalatā: A Collection of Legendary Stories about the Bodhisattvas by Kṣemendra. With Its Tibetan Version Called rTogs brjod dpag bsam 'khri shing by Shongton lochāva and Paṇḍita Lakṣmīkara. Now First Edited from a Xylograph of Lhasa and Sanskrit Manuscripts of Nepal.* Ed. Sarat Chandra DĀS, Hari Mohan VIDYĀBHUṢAṆA, and Satis Chandra VIDYĀBHUṢAṆA. Bibliotheca Indica New Series Nos. 777, 826, 848, 860, 886, 1168, 1257, 1262, 1295, 1310, 1354. 2 vols. Calcutta: Baptist Mission Press, 1888–1918.
- Avadānaśataka Avadānaśataka: A Century of Edifying Tales Belonging to the Hīnayāna.* Ed. Jacob Samuel SPEYER. Bibliotheca Buddhica III. 2 vols. St. Petersburg: Académie impériale des sciences, 1906–1909.
- Bodhicaryāvatāra Prajñākaramati's Commentary to the Bodhicaryāvatāra of Āntideva.* Ed. Louis de LA VALLÉE POUSSIN. Bibliotheca Indica New No. 983, 1031, 1090, 1102, 1139, 1305, 1399. Calcutta: Asiatic Society, 1901.
- Caturvargasamgraha* “Mahākaviśrīkṣemendrakṛtaḥ caturvargasamgraha.” In *Kāvyamālā: A Collection of Old and Rare Sanskrit Kāvya, Nātakas, Champūs, Bhāṇas, Prahāsanas, Chandas, Alankāras &c.*, ed. Mahāmahopādhyāya Paṇḍit DURGĀPRASĀD and Kāśīnāth Pāṇḍurang PARAB, 85–101. Part V. Bombay: Nirṇaya Sāgar Press, 1888.
- Daśāvatāracarita The Daśāvatāracaritam of Kṣemendra.* Ed. Mahāmahopādhyāya Paṇḍita ŚIVADATTA and Kāśīnāth Pāṇḍurang PARAB. Kāvyamālā 26. Bombay: Nirṇaya Sāgar Press, 1891. Reprint: New Delhi: Munshiram Manohar Lal Publishers, 1983.
- Divyāvadāna The Divyāvadāna: A Collection of Early Buddhist Legends.* Ed. Edward Byles COWELL and Robert Alexander NEIL. Cambridge: The University Press, 1886. Reprint: Delhi: Indological Book House 1987.
- dGos 'dod kun 'byung Tāranāthae de Doctrinae Buddhicae in India Propagatione.* Ed. Anton SCHIEFNER. St. Petersburg: Académie impériale des sciences, 1868. Reprint: Tokyo: Suzuki Research Foundation, 1963.
- Haravijaya The Haravijaya of Rājānaka Ratnākara: With the Commentary of Rājānaka Alaka.* Ed. Paṇḍit DURGĀPRASĀD and Kāśīnāth Pāṇḍurang PARAB. Kāvyamālā 22. Bombay: Nirṇaya Sāgar Press, 1890.
- Haribhaṭṭajātakamālā* See HAHN 2011.
- Kāvya prakāśa Kāvya prakāśaḥ: Śrīmāṇīkyacandraviracitasāṅketasametah.* Ed. Vāsudevaśāstrī ABHYANKARA. Ānandāśrama Sanskrit Series 89. Poona: Ānandāśrama Press, 1921.
- Mahāvastu Le Mahāvastu: Texte sanscrit.* Ed. Émile SENART. Collection d'ouvrages orientaux seconde série. 3 vols. Paris: Imprimerie nationale, 1882–1897. Reprint: Tokyo: Meicho-Fukyū-Kai, 1977.
- Naiśadhīyacarita Śrīharsha's Naiśadhīyacharita: With the Commentary (Naiśadhīyaprakāśa) of Nārāyaṇa.* Ed. Paṇḍit ŚIVADATTA. Bombay: Nirṇaya Sāgar Press, 1894.
- Nāṭyaśāstra Nāṭyaśāstra of Bharatamuni: With Commentary Abhinavabhāratī on Adhyāya VI Only.* Ed. M. Ramakrishna KAVI. Gaekwad's Oriental Series No. 36. Baroda: Oriental Institute, 1926.

Pāṇini See KATRE 1987.

Ratnāvalī *Ratnāvalī Nāṭikā: Nigūḍakaropābhidhena nārāyanaśarmaṇā kṛtāyā prabhākhyavyākhyayā munḍitā joḡalekarakuloṭpannena mādhasasūnūnā kṛṣṇaśarmaṇā nibadhnītenopoddhātena sametā.* Ed. Krishnarao JOGLEKAR. Bombay: Nirṇaya Sāgar Press, 1913.

Samghabhedavastu *The Gilgit Manuscript of the Saṅghabhedavastu: Being the 17th and Last Section of the Vinaya of the Mūlasarvāstivādīn.* Ed. Raniero GNOLI. Serie Orientale Roma Vol. XLIX. 2 vols. Roma: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente, 1977.

Śrīkaṇṭhacarita *The Śrīkaṇṭhacarita of Maṅkhaka: With the Commentary of Jonarāja.* Ed. Paṇḍita DURGĀPRASĀD and Kāśīnāth Pāṇḍurang PARAB. Kāvyaṃālā 3. Bombay: Nirṇaya Sāgar Press, 1887.

Suvṛttatilaka “Mahākaviśrīkṣemendrakṛtaṃ suvṛttatilakam.” In *Kāvyaṃālā: A Collection of Old and Rare Sanskrit Kāvya, Nāṭakas, Champūs, Bhāṇas, Prahāsanas, Chandas, Alankāras &c.*, ed. Mahāmahopādhyāya Paṇḍita DURGĀPRASĀD and Kāśīnāth Pāṇḍurang PARAB, 29–54. Part 2. Bombay: Nirṇaya Sāgar Press, 1886.

(2) 二次文献

APPLETON, Naomi. 2020. *Many Buddhas, One Buddha: A Study and Translation of Avadānaśataka 1–40.* Sheffield: Equinox.

ENOMOTO Fumio 榎本文雄. 2009. “‘Shishōtai’ no gen‘i to indo bukkū ni okeru ‘sei’ 「四聖諦」の原意とインド仏教における「聖」.” *Indo tetsugaku bukkū gaku* 印度哲学仏教学 24:336–354.

FEER, Léon. 1891. *Avadāna-Çataka: Cent légendes bouddhiques.* Annales du Musée Guimet XVIII. Paris: Leroux. Reprint: Amsterdam: Academic Publishers Associated Oriental Press, 1979.

HAHN, Michael. 1982. “Kumāralātas Kalpanāmaṇḍitikā Dṛṣṭāntapāṅkti: Nr. 1 Die Vorzüglichkeit des Buddha.” *Zentralasiatische Studien* 16:309–336.

———. 1985. *Der grosse Legendenkranz (Mahajjātakamālā): Eine mittelalterliche buddhistische Legendensammlung aus Nepal.* Asiatische Forschungen Monographienreihe zur Geschichte, Kultur und Sprache der Völker Ost- und Zentralasiens Band. 88. Wiesbaden: Otto Harrassowitz Verlag.

———. 2011. *Poetical Vision of the Buddha’s Former Lives: Seventeen Legends from Haribhaṭṭa’s Jātakamālā.* New Delhi: Aditya Prakashan.

HIKITA Hiromichi 引田弘道. 2004. “Ashōka ou monogatari sono ichi アシヨーカ王物語 (その一).” *Ningen Bunka* 人間文化 19:227–256.

JHA, Sumitra Mangesh. 1917. *The Kāvyaṃālā-sūtras of Vāmana.* Allahabad. Reprint: Delhi: Sri Satguru Publications, 1990.

DE JONG, Jan Willem. 1979. *Textcritical Remarks on the Bodhisattvāvadānakalpalatā Pallavas 42–108.* Studia Philologica Buddhica Monograph Series II. Tokyo: Reiyukai Library.

———. 1996. “Notes on the Text of the Bodhisattvāvadānakalpalatā, Pallavas 7–9 and 11–41.” *Hokke bunka kenkyū* 法華文化研究 22:1–93.

KAMIMURA Katsuhiko 上村勝彦. 1990. *Indo koten engekiron ni okeru bīteki keiken: Abhinavagupta no rasa ron* インド古典演劇論における美的経験・Abhinavagupta の rasa 論. Tokyo: Tokyo daigaku shuppan kai 東京大学出版会.

KATRE, Sumitra Mangesh. 1987. *Aṣṭādhyāyī of Pāṇini.* Austin, Texas: University of Texas Press.

LOKESH CHANDRA. 2016. *India and China.* Śāta-pīṭaka Series Indo-Asian Literatures Vol. 650. New Delhi: International Academy of Indian Culture and Aditya Prakashan.

MASSON, Jeffrey Moussaieff, and M. V. PATWARDHAN. 1969. *Śāntarasa and Abhinavagupta’s Philosophy of Aesthetics.* Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute.

MATSUDA Kazunobu 松田 和信. 2020. “Daichidoron ni okeru ashuvagōsha: nyorai jūgōron ni umekomareta sōgonkyōron 大智度論におけるアシュヴァゴージャ・如来十号論に埋め込まれた莊嚴經論.” *Indogaku bukkūōgaku kenkyū* 印度学仏教学研究 69-1: 428–436.

———. 2021. “Daichidoron ni okeru ashuvagōsha: kairon ni umekomareta sōgonkyōron 大智度論におけるアシュヴァゴージャ・戒論に埋め込まれた莊嚴經論.” *Indogaku bukkūōgaku kenkyū* 印度学仏教学研究 70-1: 455–462.

OKANO Kiyoshi 岡野 潔. 2005. “Avadānakalpalatā kara avadānamālā rui e Avadānakalpalatā から avadānamālā 類へ.” *Indogaku bukkūōgaku kenkyū* 印度学仏教学研究 54-1: 367–374.

PANGLUNG, Jampa Losang. 1981. *Die Erzählstoffe des Mūlasarvāstivāda-Vinaya: Analysiert auf Grund der tibetischen Übersetzung.* Studia Philologica Buddhica Monograph Series 3. Tokyo: Reiyukai Library.

RAGHAVAN, Venkatarama. 1940. *The Number of Rasas.* Adyar: Adyar Library.

SATŌ Mitsuo 佐藤 密雄. 1963. *Genshi bukkūō kyōdan no kenkyū* 原始仏教教団の研究. Tokyo: Sankibō busshorin 山喜房仏書林.

- SHASTRI, Surendra Nath. 1961. *The Laws and Practice of Sanskrit Drama: An Investigation into the Canons of Sanskrit Dramaturgy and Their Application to Some Principal Plays in Sanskrit*. Varanasi: Chowkhamba Sanskrit Series Office.
- SMITH, David. 1985. *Ratnākara's Haravijaya: An Introduction to the Sanskrit Court Epic*. Oxford University South Asian Studies Series. Delhi: Oxford University Press.
- YAMASAKI Kazuho 山崎 一穂. 2016. “On the Legend of the Dharmarājikāpratiṣṭhā.” *Indogaku bukkyōgaku kenkyū* 64-3: 1185–1191.
- . 2020. “Avadānakalpalatā ni okeru jō ni tsuite Avadānakalpalatā における〈情〉について.” *Hikaku ronrigaku kenkyū* 比較論理学研究 17:65–79.
- . 2021a. “Avadānakalpalatā ni mirareru zō no byōsha ni tsuite: danapāra monogatari wo chūshin to shite Avadānakalpalatā に見られる象の描写について・ダナパーラ物語を中心として.” *Hikaku ronrigaku kenkyū* 比較論理学研究 18:69–84.
- . 2021b. “Similes in the Avadānakalpalatā.” *Indogaku bukkyōgaku kenkyū* 印度学仏教学研究 69-3: 1027–1032.

(やまさき かずほ、公益財団法人中村元東方研究所 [インド哲学])

Śāntarasa in the Avadānakalpalatā

YAMASAKI Kazuho

The Kashmiri poet Kṣemendra (ca. 990–1066 CE) devotes the thirty-ninth chapter of his *Avadānakalpalatā* (Av-klp) to the legend of a heretic named Kapila, who was reborn as a sea monster as a result of his actions in his former lives. In his *Aucityavicāracarcā*, a treatise upon poetic propriety, Kṣemendra expressly declares that the predominant sentiment (*rasa*) of the Av-klp is peaceful (*śānta*). However, one can hardly ignore the fact that the poet takes pains to suggest a variety of sentiments suitable to the characters and themes he depicts in the Av-klp. This paper aims to address how the poet suggests a peaceful sentiment in his version of the legend of Kapila.

A glance at the text of verses 101–107, which tell us that Kapila attained the stage of stream-enterer (*srota-āpatti*), reveals the words *satyadarśin* (“one who sees the truth”) and *bhaktiyā praṇanāma* (“[Kapila] prostrated himself with devotion”), which are used to describe the determinant (*sthayibhāva*) and the symptom (*anubhāva*) of a peaceful sentiment, respectively. Moreover, a closer examination of the text shows that Kṣemendra avoids using words inappropriate to the context where the same sentiment is suggested.

In verse 107, Kṣemendra notably uses a simile in which a sea monster (*makaraḥ*) and a group of people (*janakāyaḥ*) are compared to a blade of grass (*tṛṇam*). The words *makaraḥ* and *janakāyaḥ* are masculine in gender, whereas the word *tṛṇam* is neuter. According to poetic theorists, a poet must construct a simile so that the standard of comparison can agree in gender, number, and case with the subject of comparison. It is generally accepted by poets that in a drama, stress is placed upon the suggestion of a sentiment rather than upon the observance of poetic rules. Interestingly, in verse 51 of the *Caṇḍīśataka*, a poem dedicated to the goddess Caṇḍī, the poet Bāṇa (seventh-century CE) employs a simile in which an enemy (*aris*) is compared to a blade of grass (*tṛṇam*) without observing the rules of grammatical agreement. The subject matter as well as stylistic features lead us to infer that in the verse in question, the poet suggests a mixture of two different sentiments, i.e., the furious (*raudra*) and the heroic (*vīra*), which points to the possibility that from the ninth-century CE onwards at the latest, poets attached greater importance to the suggestion of a sentiment than to the observance of poetic rules in a poem.

Consideration of these points brings us to the following conclusion: (1) Kṣemendra, observing poetic propriety, implicitly suggests a peaceful sentiment through the words used to describe the determinant and the symptom of the same sentiment. (2) In verse 107, Kṣemendra, who grants pride of place to the suggestion of a sentiment, uses a simile not constructed within the confines of the rules established by poetic theorists, following the example of his predecessors.